

高知県梼原町
和田城跡

1990年3月

高知県梼原町教育委員会

高知県梼原町

和田城跡

1990年3月

高知県梼原町教育委員会



和田城跡（矢印）

序

梼原の里は、延喜13年（913）左大臣藤原仲平の子、経高が、伊予国久万山から土佐国梼原に入り、開拓を始めた時にはじまると伝えられる。

経高は敬神の念厚く、三島神社を勧請するなど神仏を信仰し、天慶3年（940）藤原純友の乱起るや、河野好方に属してこれを平定し、西の護りとして、梼原城や和田城を築いたと言われる。

以来1080年の歳月が流れ、和田城跡には、川西路部落の氏神、稻荷神社、出雲神社を奉斎し、雑木や松が生茂り、石垣を抱いた椎の木を除けば、往時を偲ぶよすがもない状態となった。

最近過疎現象のなかで、中央地区は人口急増し山麓の人家もかけ地接近危険住宅として防災事業を申請いたしていたところ、建設省の急傾斜崩壊防止事業に採択されたものの、城跡であることから埋蔵文化財の発掘に着手戴き、嚴寒の中での発掘作業は大変なことであったと存じます。

百点を超える文化財を収集出来たと承っております。何かと御指導賜わりました県文化振興課の皆様に深甚の謝意を表するものであります。

急傾斜崩壊防止事業も危険な山頂部分を除去して戴き、関係者権者の御協力広々とした避難場所が出来上り、和田城跡にふさわしい構造改善センターの建設を行い、埋蔵文化財の展示を行うと共に被害のない住み良い町づくりに努力を傾注する考えであります。

何かと御協力賜りました建設省砂防部、県砂防課、農林水産省、県農林部の皆さまに衷心より感謝の誠を捧げご挨拶いたします。

平成2年3月吉日

梼原町長 中 越 準 一

例　　言

1. 本書は、梼原町川西路防災事業にかかる和田城跡の発掘調査報告書である。
2. 城跡は、高知県高岡郡梼原町川西路に所在する。
3. 発掘調査は、昭和63年11月7日～12月21日まで実施し、平成元年度に整理作業・報告書作成を行った。調査面積は、約1020m²である。
4. 調査は、梼原町教育委員会が主体となって行い、発掘調査は松田直則（高知県教育委員会文化振興課）、事務・総括は中越拓平（梼原町教育委員会教育課長補佐）が担当した。
5. 本書の編集・作成は梼原町教育委員会が行い、報告書作成業務及び執筆は特に表記しない限り松田直則が行った。遺構の実測は、松田直則と岡本健（町建設課）が主に行った。
6. 本書の作成に際し、岡本健児高松短期大学教授にご教示を得た。記して感謝する次第である。
7. 調査にあたっては、須崎土木事務所津野山出張所、梼原町建設課、梼原町文化財保護審議会委員、地元関係者に全面的な協力を得た。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。
8. 発掘調査には下記の方々の協力を得た。（順不同、敬称略）
中平善一郎 河野数雄 三好政太郎 中平由利子 河野貞子 中平国子 西川富恵
高橋善美 氏原稔子
9. 出土遺物及び調査資料は梼原町教育委員会において保管している。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	3
III 城跡の概要	7
IV 調査の概要	9
V 検出遺構	10
VI 出上遺物	21
VII まとめ	26
付編 棒原町唐岩番所に伝わる遺物について	29

挿 図 目 次

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 第1図 柿原町位置図 | 第13図 堀切2地形測量図・断面図 |
| 第2図 周辺の遺跡分布図 | 第14図 堀切1・2セクション図 |
| 第3図 和田城跡位置図 | 第15図 SB1実測図 |
| 第4図 柿原東区旧小字図 | 第16図 SK1実測図 |
| 第5図 和田城跡周辺地籍図(宮首) | 第17図 SX1実測図 |
| 第6図 和田城跡周辺地形図 | 第18図 SX2実測図 |
| 第7図 発掘調査区位置図 | 第19図 遺物実測図1 |
| 第8図 発掘区遺構配置概略図 | 第20図 遺物実測図2 |
| 第9図 II郭Bセクション図 | 第21図 古錢拓影 |
| 第10図 土塁・III郭セクション図 | 第22図 中世出土遺物内訳 |
| 第11図 石垣1~4実測図 | 第23図 唐岩番所伝遺物実測図 |
| 第12図 石垣5実測図 | |

付図1 和田城跡発掘調査前地形測量図

付図2 和田城跡発掘調査後地形測量図

図版目次

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 図版1 和田城跡遠景（南から） | 図版12 石垣5（西から） |
| 和田城跡（東から） | 城跡調査後遠景 |
| 図版2 II郭B調査前（南から） | 図版13 石垣1・堀切2 |
| II郭全景（北から） | 堀切2西斜面部 |
| 図版3 II郭Bトレンチ設定（北から） | 図版14 堀切2セクション |
| II郭B南北セクション | 堀切1（南から） |
| 図版4 II郭B南北セクション | 図版15 堀切1（北から） |
| II郭B東西セクション | 堀切1セクション |
| 図版5 SK1遺物出土状況 | 図版16 出土遺物1 |
| SX1 | 図版17 出土遺物2—1 |
| 図版5 SX2 | 出土遺物2—2 |
| SX2洞口出土状況 | 図版18 出土遺物3—1 |
| 図版7 SB1（北から） | 出土遺物3—2 |
| SB1全景（北から） | 図版19 出土遺物4—1 |
| 図版8 石垣1調査前（北から） | 出土遺物4—2 |
| 石垣全景（東から） | 図版20 出土遺物・唐岩番所遺物5 |
| 図版9 石垣2 | 図版21 唐岩番所遺物6 |
| 石垣3 | |
| 図版10 石垣4 | |
| 石垣2・4 | |
| 図版11 石垣5（西から） | |
| 石垣5（南から） | |

I 調査に至る経過

梼原町は、山岳地帯の町で急峻な地形と仏像構造線を含む脆弱な地質が多く、風水害と雪害による灾害を毎年のように受けている。川西路の独立丘陵に所在する和田城跡付近も、急傾斜地の危険箇所として指定されている。城跡の北側を除く周囲には、地区集会所・総合福祉センターの公共施設や、9戸26棟の民家が所在し、25名の住民が日々危険にさらされながら生活を営んでいる。このような状況の中、昭和62年12月18日地域住民より防災工事を施してほしいという陳情書が町に提出され、さらに昭和63年5月25日には地域住民の将来起りうる危険を取り除くため大規模に川西路の独立丘陵の除去を求める陳情書が提出された。このような地域の住民による要望に、町・県の関係当局が国に対して陳情、説明することにより、昭和63年9月1日県の工事として4ヵ年計画で川西路急傾斜崩壊対策事業として採択された。

川西路急傾斜崩壊対策事業計画は、大規模に独立丘陵を除去するということでここに立地する和田城跡も含まれる内容であった。和田城跡は、津野氏の居城梼原城の支城として存在し梼原川を自然の堀として利用し、防御的に良好な場所に位置しており、遺構も堀切を始め土塁が残存している。和田城跡は、梼原町における歴史的背景を踏まえて昭和38年2月28日梼原村教育委員会告示第5号により梼原村文化財保護記念物とされ、さらに梼原町文化財保護条例（昭和36年9月29日条例第10号）に基づき指定し、昭和60年12月7日梼原町教育委員会告示第1号により梼原町文化財保護史跡として改定し現在に至るまで保護されている。昭和58年は、高知県教育委員会による中世城館遺跡調査がなされ他の9ヶ所の城館とともに周知されている。

これらのことから、町教育委員会・県教育委員会・県土木部砂防課・須崎土木事務所津野山出張所は、川西路急傾斜崩壊対策事業の必要性と和田城跡の保護対策について数度に亘る協議を実施した。町教育委員会の対応としては町文化財保護審議会の答申に基づき、地域住民の要望も取り入れ将来の生活を最優先し、今後生じうると予想される災害面を重視せざるを得ず、遺憾ながら埋蔵文化財の調査で記録保存をしその後地域の実情に即した保存管理をすることを議決した。

県土木部も調査には全面的に協力するということで高知県教育委員会の指導のもと梼原町教育委員会が発掘調査を実施するに至った。発掘調査は、昭和63年11月7日～12月21日まで実施した。



第1図 梼原町位置図



- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 和田城 (中世) | 6. 鳴ガウネ古城 (中世) |
| 2. 岡之城 (中世) | 7. 速見ヶ城 (中世) |
| 3. 古城 (中世) | 8. 横原城 (中世) |
| 4. 鶯ヶ森城 (中世) | 9. 下折渡遺跡 (縄文) |
| 5. 壁路山城 (中世) | 10. 影野地遺跡 (縄文) |

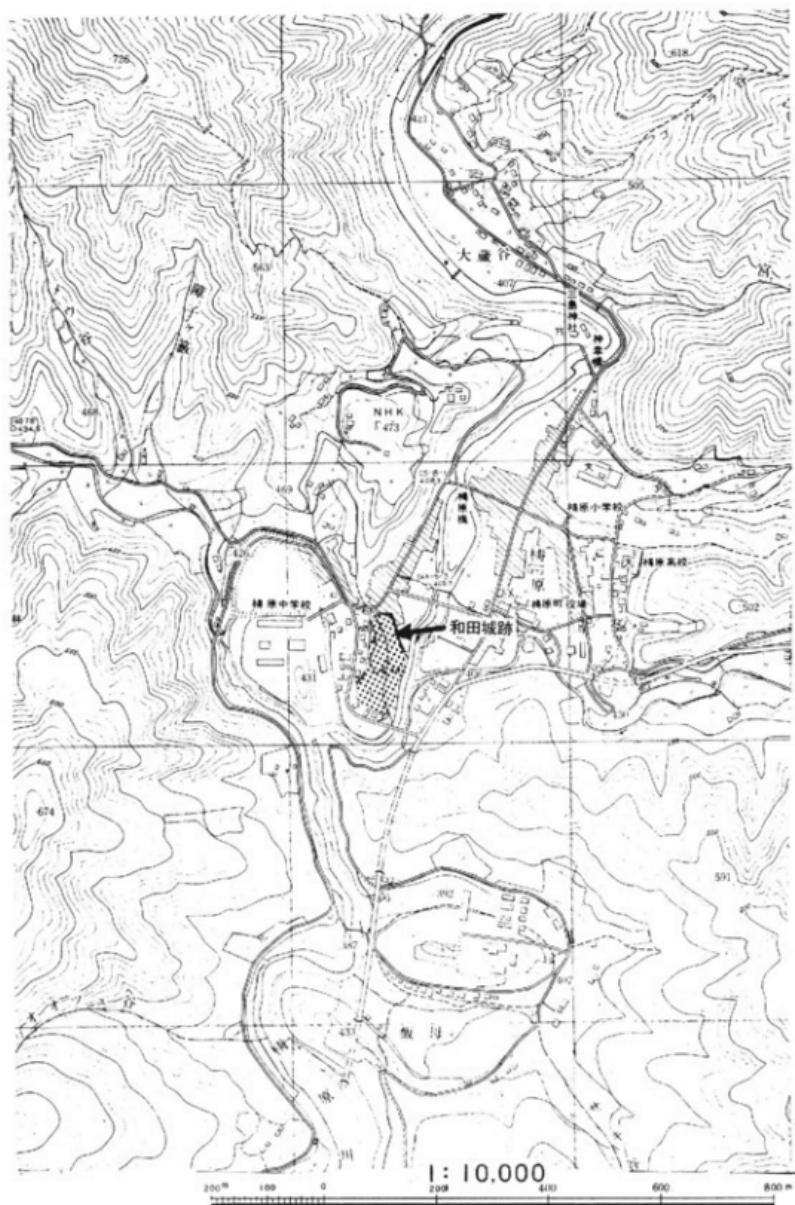
第2図 周辺の遺跡分布図

II 遺跡の位置と歴史的環境

梼原町は、高知県中西部山岳地帯の愛媛県に接する県境に位置する。北側は四国カルスト県立自然公園で愛媛県の柳谷村・野村町と接し西側は、雨包山（あまつつみやま）・高研山（たかとぎやま）・地藏山（じぞうやま）を結ぶ山系をもって愛媛県城川町・日吉村と接している。四万十川支流の梼原川・四万川・北川川が町域を下流し、梼原・田野野・六丁などの集落が開けている。和田城跡は、六区に分かれる行政区域の梼原東区の大字川西路に所在する。川西路地区は、西南日本外帯の秩父帯と四万十帯にまたがる地域であり両帯を境とする仏像構造線上に位置する。仏像構造線を境とした北側の秩父帯の高峰のひとつである坊主山（1162.6m）から南側に派生する丘陵の先端部で、梼原川と国道197号線から町道和田島線にはさまれた標高436mの独立丘陵に構築されたのが和田城跡である。この独立丘陵は砂岩と頁岩から構成されており、砂岩は灰褐色化され風化が著しい。城跡は、砂岩及び一部に見られる頁岩を削平し1郭から3郭までの平坦部を形成している。

歴史的環境は、県内でも古く旧石器から縄文早期まで遡ることができる。縄文前期の前葉を主体とした影野地遺跡は、初瀬の影野地奈路に所在する。昭和51年に発見され土器・石器類が表採されている。土器は、轟B式系土器と羽島下層式土器である。石器は、石錐を主体とするが石質はチャートが主体の中にサヌカイト・瓶島産黒曜石が混入しており注目されている。さらに2点のナイフ形石器が確認されており、その後も削器・楔形石器などが発見されている。その他の縄文時代の遺跡として松原地区の中平遺跡・庄司ヶ市遺跡・影地遺跡・初瀬地区の下折渡遺跡が所在する。これらの縄文遺跡は木村剛朗・西本則夫両氏の踏査により発見されたものが多く地道な調査研究がなされている。今後四万川上流域の山岳地帯の縄文文化を研究するうえにおいてこれららの遺跡は看過できないものである。

弥生時代から鎌倉時代までの遺跡は未確認であり、昭和58年に実施した高知県中世城館の分布調査により10ヶ所の城跡・砦が報告されている。町内で最大規模を有する山城は梼原城である。梼原城は、遺構の残りも良く連続する尾根上に詰を中心に東方に4ヶ所、西方に5ヶ所の堀切が残存する。詰には土壘状の遺構も確認できる。築城者は津野氏とされている。その他には、岡之城・鷺ヶ森城・皿ヶ森城・達見ヶ城・壁路山城・鳩ガウネ古城・古城・西の川砦が確認されている。土居跡は確認されておらず城跡の名称も数少ない文献資料で散見されるのみで中世の様相を語ることは現段階では困難である。中世城館で文献資料として主に使用されているのは前田家蔵文書・中越家系図・土佐州郡志・土佐古城略史等である。今後中世においては、長宗我部地検帳を基に精密な分布調査が望まれる所である。



第3図 和田城跡位置図



第4図 柿原東区旧小字図

1 : 25000



第5図 和田城跡周辺地籍図（宮首）

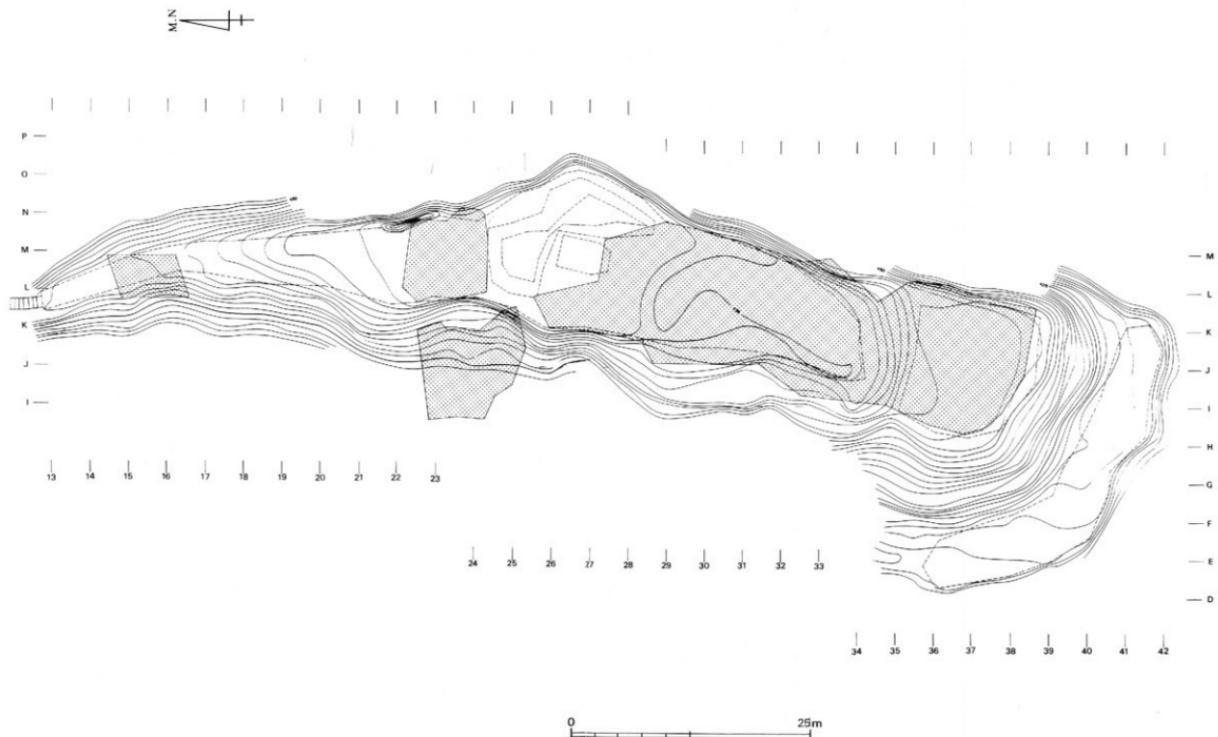
III 城跡の概要

和田城跡は、「前田家蔵文書」にその名称が見られるのみで詳細は不明である。伝承では、椿原城の支城として伝えられている。椿原城は、津野氏の居城とされていたが、その後津野氏は勢力拡張と共に栗山村の姫野々城に進出し、本城主は津野氏家臣の中平氏に変わっている。支城である和田城は、城主が和田氏と伝えられているが詳細は不明であり小規模な山城である。和田城は、椿原川を自然の堀として利用し、地理的に伊予からの進入路口にあたり、防御的にも良好な場所に位置している。伊予との関係が深い椿原では、藩政時代さらに明治時代頃まで交通路として盛んに用いられていた道がある。地芳崎から久万へ至るものと大野ヶ原を越えて小田へ向かう道がある。さらに九十九曲から日吉・城川方面に通ずる道がある。現在の国道も高研山をトンネルが貫通し日吉村にぬけている。戦国期においても長宗我部氏の伊予進行に利用されたものと考えられるが、椿原においてその起点となるのが和田城跡の所在する川西路である。椿原川を挟みその東側には津野氏が築城したとされる椿原城があり、伊予方面的防御的機能を果たした支城として存在価値のある山城である。椿原町ではいち早く地籍図を作成しており現在の大字名は、一部を除き、長宗我部地検帳に記載された当時の村名・字名を用いている。和田城跡は、小字宮首の南端部で椿原川が屈曲する北側に位置する。宮首の地籍図（第5図）でも分かるように北側を除き周囲は椿原川に囲まれている。小字が当時のまま残っている所があるが戦国期の伝説が残る小字として大字中の川の深入がある。元亀3年（1572）壁路山城が伊予軍に攻められた時「深入するな」と叫んだ所とされている。その他にもいたるところに伝説が残っている。

城の縄張りであるが、独立丘陵北端部から登り口になっており百段近くのコンクリートの階段が標高430mの所まで設置されている。道路から頂上までの比高差は約30mである。登り終えると尾根筋を東西に掘切が掘削されておりまず最初の防御施設である。東側は急傾斜になっているが西側は比較的傾斜が緩く下方まで堀切がのびる。さらに南に進むと平坦地が見られⅡ郭Aとした地点に出る。この地点の南側は、測査の結果堀切を埋め戻して平坦面を形成している。北側の部分は一部尾根を掘削しており東側に岩盤が残存している。西側端部は堀切を埋め戻した土留めのための石垣がみられ、西側斜面は埋め戻し前の堀切がのびる。Ⅱ郭A地点の南側は城跡の中で最も高いⅠ郭で、Ⅱ郭A地点からの比高差が約2mある。Ⅰ郭はシイの大木があり小さな祠が残存する。この地点は、南部分の大半が出雲稻荷神社が改修されたため破壊されている。北側と東側の側壁には石垣が構築されている。石垣1と2である。Ⅰ郭を取り囲むように東と西側部分に小道が開け城跡の中で最も広い平坦部であるⅡ郭Bに出る。Ⅱ郭Bは、約400m²あり南端部及び東側部は土塁に囲まれている。東側土塁は一部墓地化され破壊されている。Ⅱ郭Bの南端部土塁を乗り越え急傾斜してⅢ郭にいたる。Ⅱ郭Bとの比高差は約2.5mである。Ⅲ郭は174m²の広さであるが、遺構は皆無である。



第6図 和田城跡周辺地形図



第7図 発掘調査区位置図（スクリントーンは調査区）

IV 調査の概要

工事対象区域が独立丘陵全体において広範囲に削平するため、調査対象範囲も山城という性格から斜面部も含め広範囲におよんだ。しかし東側斜面部は、急傾斜のため調査不可能であった。調査区設定のため便宜上平坦部を中心にⅠ郭・Ⅱ郭A・B・Ⅲ郭と名称し調査を実施した。Ⅰ郭については、その大部分が神社改修とシイの木により破壊されており北・東側面の石垣のみの調査になった。調査方法は、調査対象範囲全域を4m方限で分割し、ほぼ地形に従ってその基準方位をN—3°—Wとした。調査区は、4m区切りで東西を西からA→B→C、南北を北から1→2→3で区分しその区画の名称を北西隅の交点番号で表した。調査は、この小グリッドに従って東西・南北ともに2m幅のトレンチを設定して遺構の残存状況を把握することとその後Ⅱ郭B・Ⅲ郭を中心いて全面拡張した。斜面部は、堀切等遺構の残存する部分を選定し調査を実施した。城跡全体の調査前の地形測量を $\frac{1}{100}$ で作成し、発掘区については上層断面図及び遺構平面図(縮尺 $\frac{1}{20}$)、併せて発掘終了後の地形測量(縮尺 $\frac{1}{100}$)も実施した。

基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：茶褐色礫土、Ⅲ層：礫層、Ⅳ層：茶褐色土、Ⅳ'層：茶褐色土(土壘)、Ⅴ層：黄褐色粘質土である。これらの基本層序は、Ⅱ郭Bを中心とした層序であり、Ⅱ郭A・Ⅲ郭は表土層を除去すると基盤の砂岩になる。Ⅴ層の黄褐色粘質土は、包含層でⅡ郭BのK—30ラインまで認めることができる。北側のK—27・28ラインになるとⅠ郭からの流れ込みとなる。Ⅳ層もⅤ層の上面でⅠ郭からの流れ込みと考えられⅡ郭Bの北側にしか残存しない。Ⅱ・Ⅲ層は、神社修築の際にⅠ郭削平の残土と考えられ、直下に包含層が認められることから旧表土は大部分削除されたものと考えられる。Ⅱ郭BのLラインから東側部分は、表土を除去すると砂岩を主体とした岩盤となっており南端部は、土壘に連結している。Ⅰ郭は、前述したごとく神社改修の削平・シイの木による攪乱のため不明だが、岩盤の上層が表土層となる。Ⅱ郭A・Ⅲ郭は、Ⅰ郭同様表土層を除去すると岩盤になり、Ⅲ郭の西側斜面部に暗褐色土と黒褐色土が流れ込んで堆積しているのみである。

調査の前段階で確認された遺構は、最北端の堀切とⅡ郭Aの西側斜面に位置する場切、Ⅰ郭北・東側面の石垣の一部、Ⅱ郭Bの南端部に位置する土壘遺構等であった。踏査の段階では、神社等の破壊が著しく小規模な山城である事から遺構・遺物は残存していないのではないかと考えられた。調査の結果、小鉄冶跡を始め掘立柱建物跡や石垣等の遺構を検出することができ、出土遺物も土師質土器・青磁・備前焼等県内の中世城館で認められる出土状況を見ることができた。

高知県では、本城のような小規模な山城が多く存在する事から、岡豊城を始めとする大規模な山城との比較検討をする中で当時の歴史的背景の中で支城として存在する中世山城の研究に貴重な資料を残すことができた。調査の成果は、検出遺構・出土遺物として次章で詳細は述べることとする。

V 検出遺構

和田城跡は、Ⅰ郭～Ⅲ郭の平坦部を形成しているがⅡ郭を中心に遺構を検出している。Ⅰ郭の北・東側面の石垣、城跡の北部に掘切、Ⅱ郭Aでは堀切と東西斜面には石垣、Ⅱ郭Bでは土塁に囲まれて掘立柱建物跡1棟（SB）・土坑1基（SK）・小鍛冶跡2基（SX）を検出した。Ⅲ郭は、表土を除去すると岩盤で遺構は検出できなかった。

1. Ⅰ郭

石垣1（第11図）

Ⅱ郭Aの南側に位置し、L-24・M-24区において検出した。調査前段階にも石垣の一部が現れており昭和の神社改修のおり石垣の一部を改築し、ミニ八十八ヶ所がおかれ石組みを龜状に組み直している。さらにその他もシイの木による根の攪乱で石垣が抜き取られている部分が多い。長さ5m、高さ1.6mの範囲で18～32cm大の河原石を不規則に積み上げられ、石垣の間隔に填込材とされている細石も河原石で8～15cm大である。裏ごめ石は認められず岩盤となっており、遺存の良好な部分の勾配は約60°である。

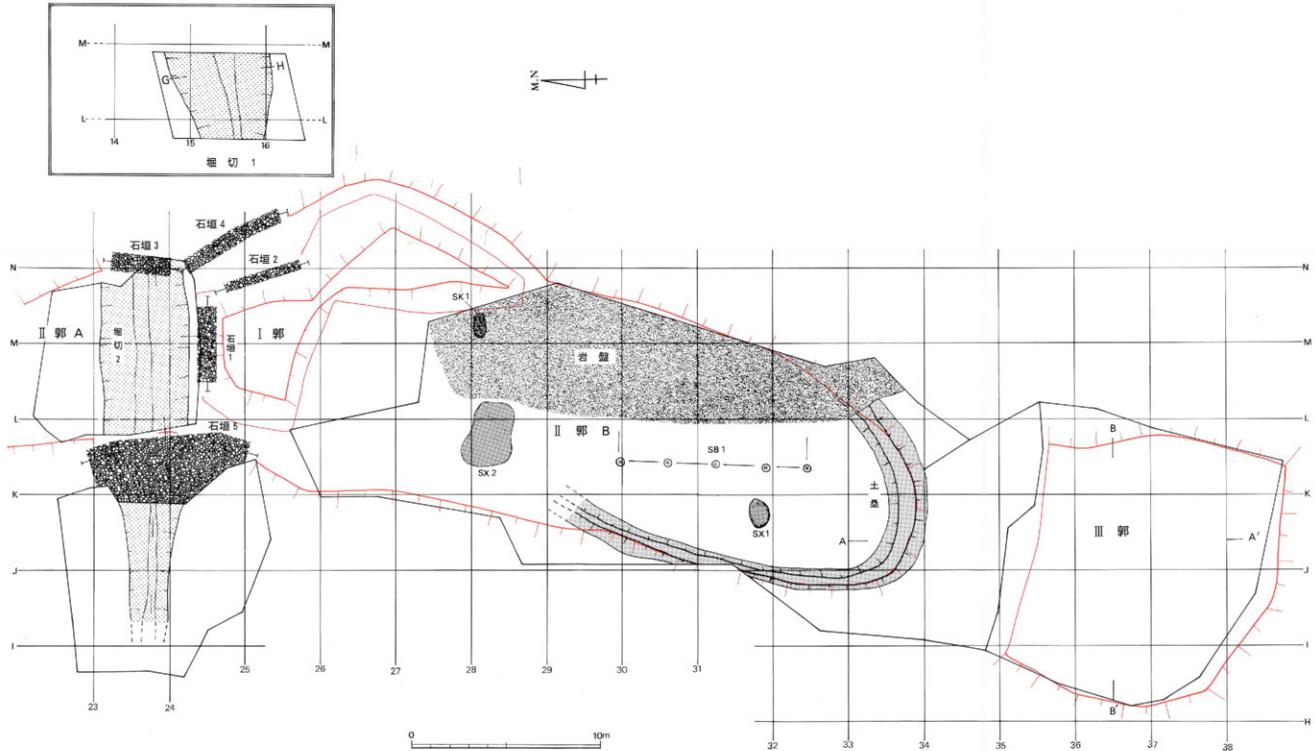
石垣2（第11図）

Ⅱ郭Aの南側Ⅰ郭の東側面に位置し、M-24・25区において検出した。調査前段階にも石垣の一部が現れていた。石垣上端部は、シイの木による根の攪乱で石垣が抜き取られている部分が多い。長さ5.8m、高さ1.5mの範囲で20～40cm大の河原石を不規則に積み上げられ、石垣の間隔に填込材とされている細石も河原石で8～15cm大である。裏ごめ石は認められず岩盤となっており、遺存の良好な部分の勾配は75°である。

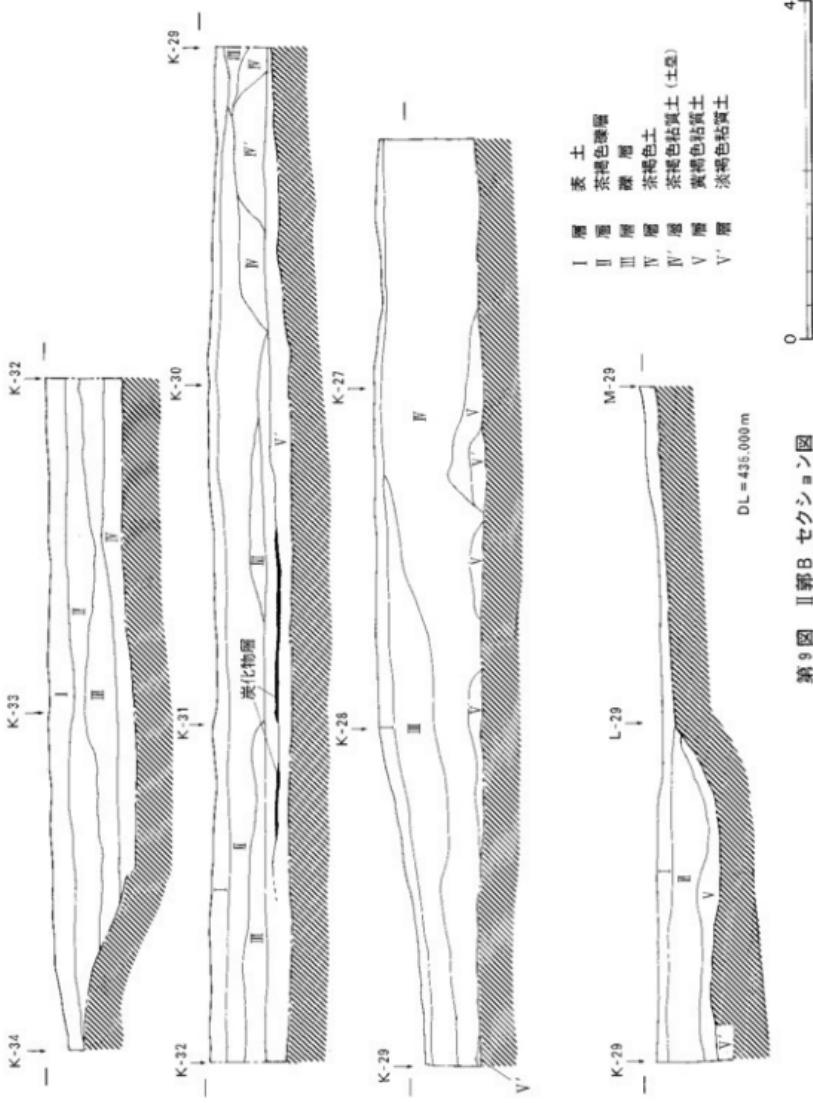
2. Ⅱ郭A・北部遺構

石垣3（第11図）

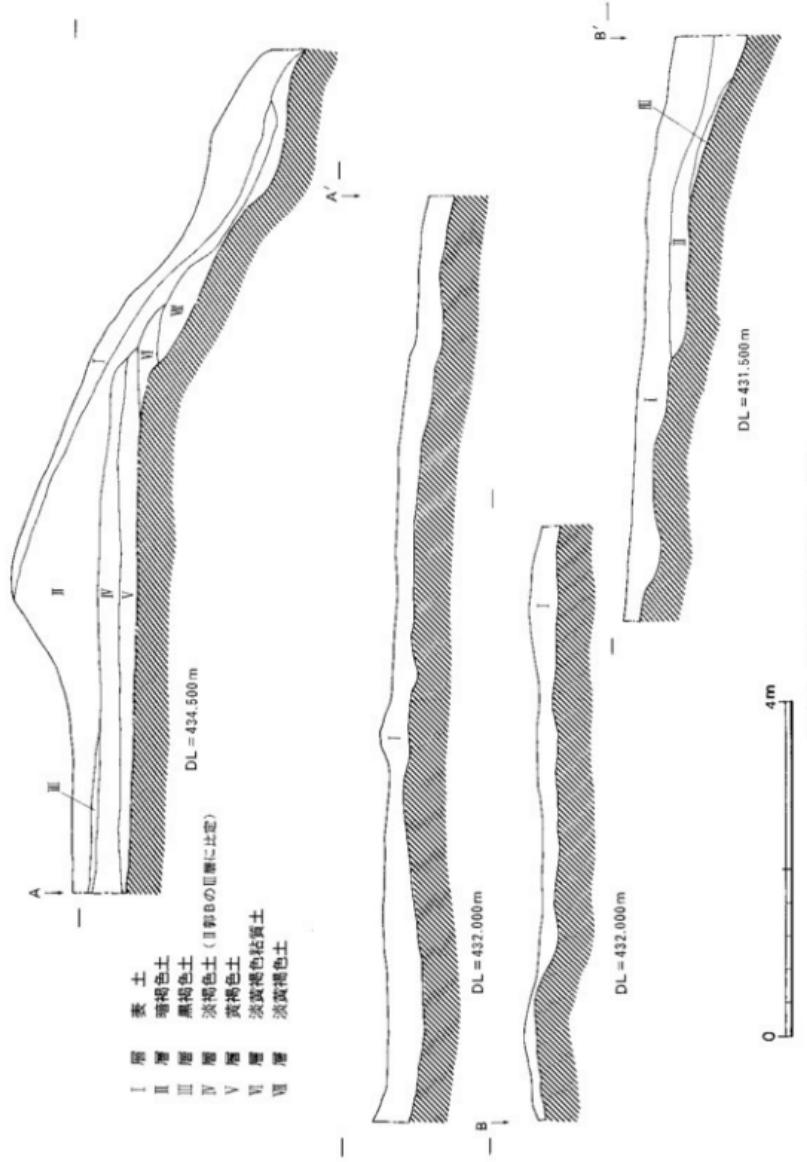
Ⅱ郭Aの南東部側に位置し、N-23区において表土層を除去した段階で検出した。石垣端部は、東側が急斜面のために調査の段階で崩壊した。本石垣は、堀切2が埋め戻され撫面補強のために構築されている。長さ4.25m、高さ1.84mの範囲で16～48cm大の河原石を不規則に積み上げられ、裏ごめ石は認められず上半部は堀切埋土の礫がその役割を果たしており、下半部は岩盤となる。遺存の良好な部分の勾配は75°である。



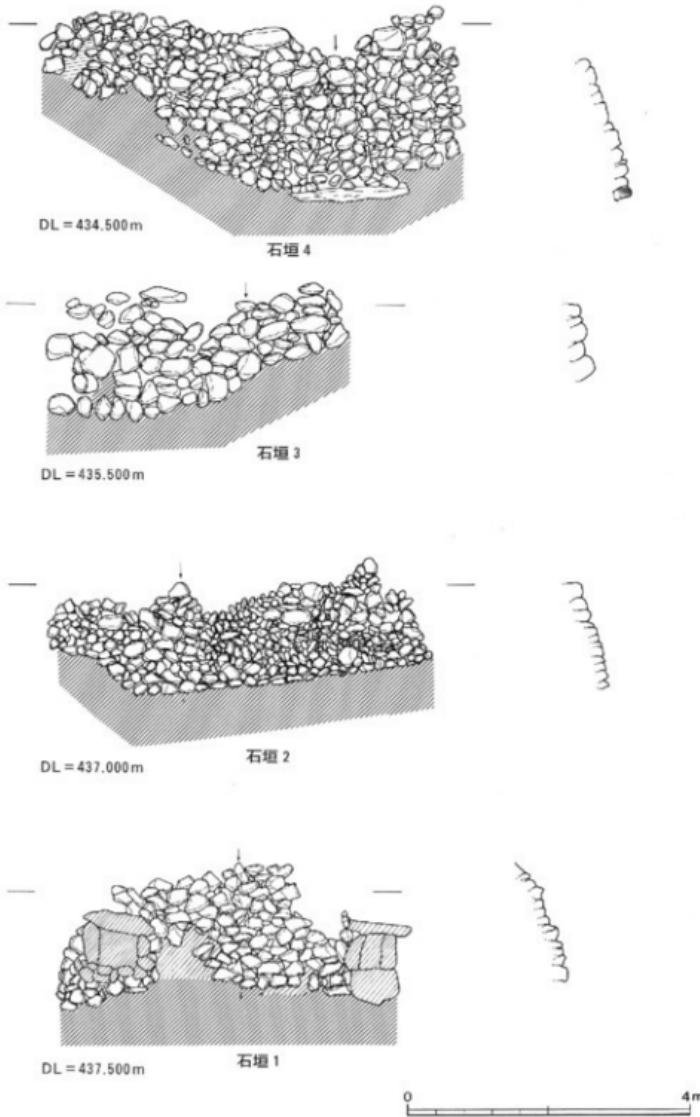
第8図 発掘区遺構配置概略図



第9図 Ⅱ 鄭B セクション図



第10図 土壌・Ⅲ郭セクション図



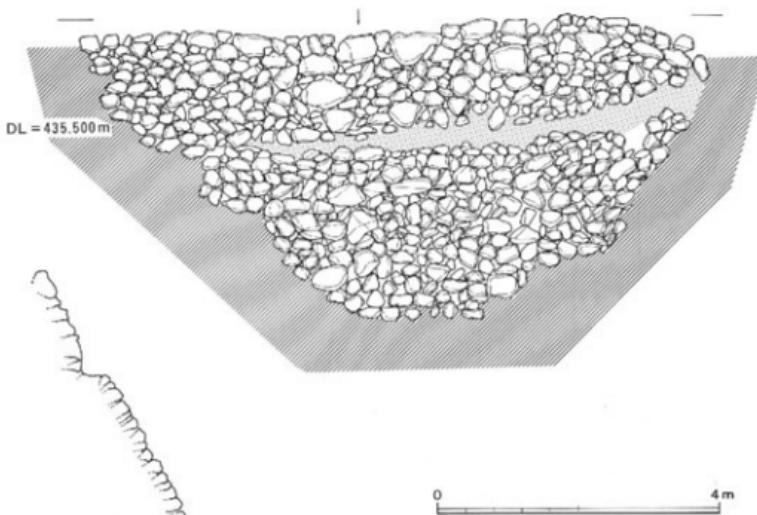
第11図 石垣 1～4 実測図

石垣4（第11図）

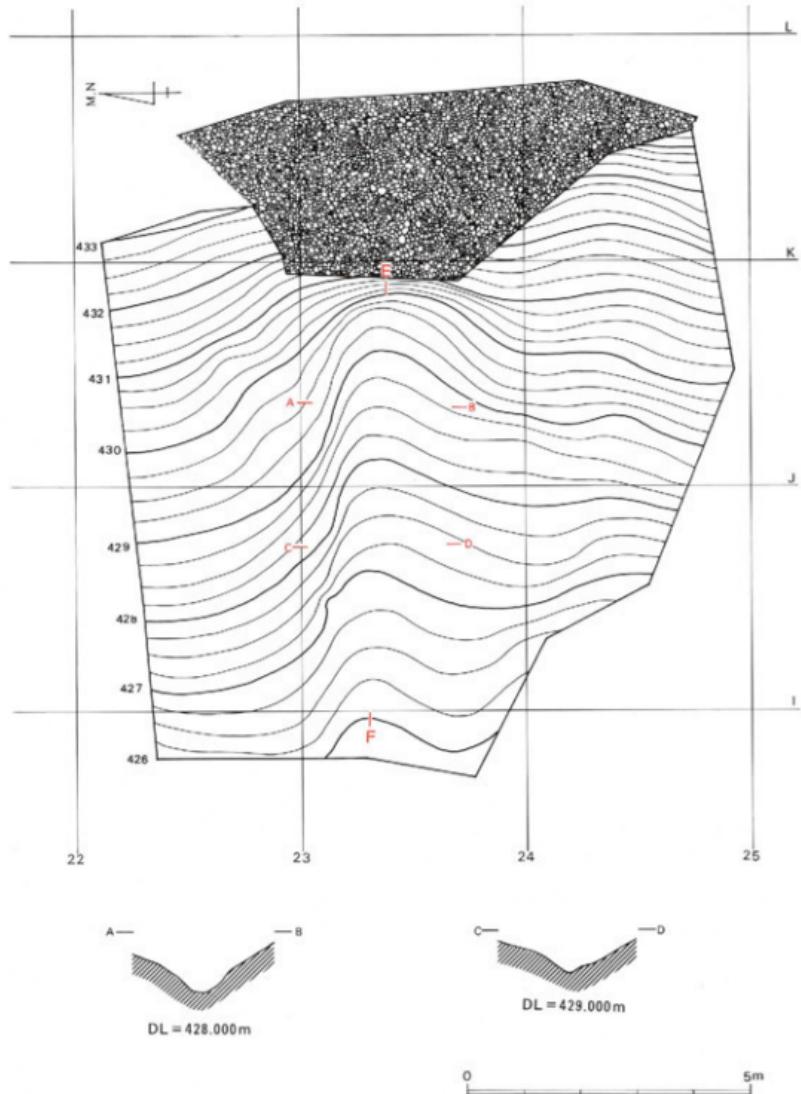
I 郡の東側面石垣2のさらに南東側に位置し、N—24・25区において表土層を除去した段階で検出した。石垣の上端部は、一部シイの木による根の攪乱で石垣が抜き取られている。長さ6m、高さ3mの範囲で30~72cm大の河原石を不規則に積み上げられ、石垣の間隔に込材とされている細石も河原石で15~25cm大である。石垣構築には、下端部に長さ1.7m、径30cmのマツ丸太材を胴木としている。裏ごめ石は認められず岩盤となっており、遺存の良好な部分の勾配は75°である。

石垣5（第12図）

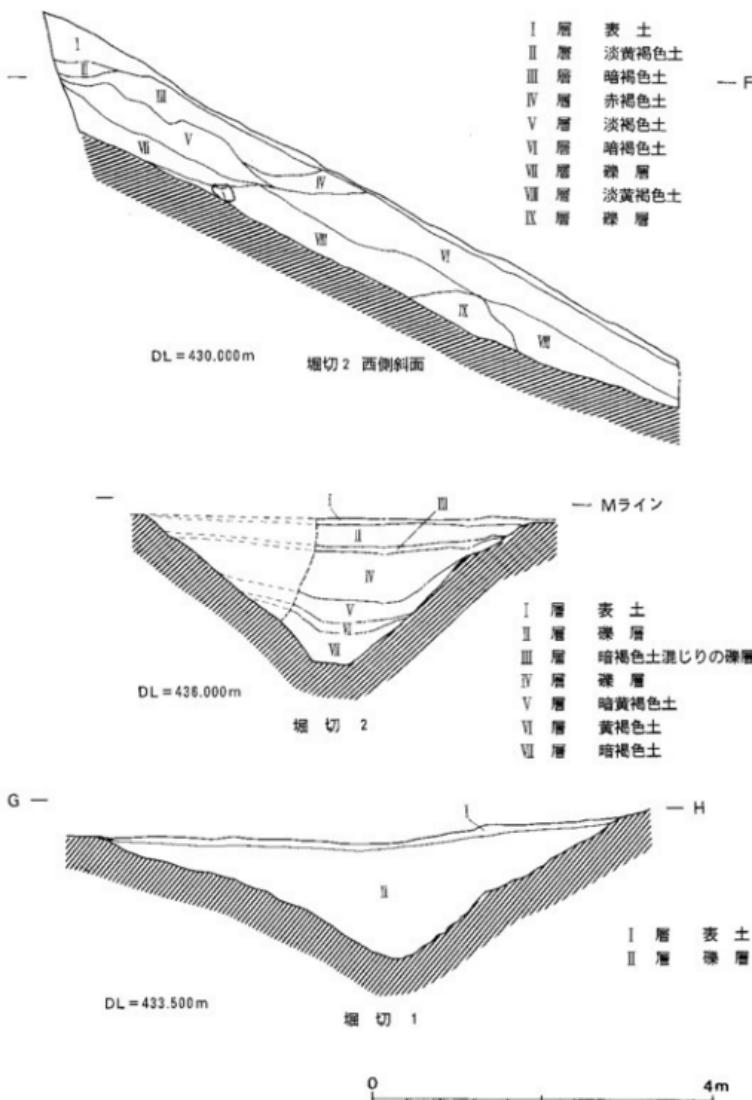
II 郡Aの南西部側面に位置し、K—23・24区において表土層を除去した段階で石垣の上端部を検出した。堀切2を埋め戻しされて側面補強のため構築されている。石垣は2段に積み上げられており、中程に幅40cmの通路状の平坦部を形成している。上段は、長さ8.8m、高さ1.5mの範囲で30~72cm大の河原石を不規則に積み上げられ、石垣の間隔に、込材とされている細石も河原石で15~20cm大である。下段は上端幅4.2m下端幅1.8m、高さ2.3mを測り、堀切面に合わせて河原石を積み上げている。裏ごめ石は認められず上段は掘切堆土の裸層、下段岩盤となっており。遺存の良好な部分の勾配は60°である。



第12図 石垣5実測図



第13図 堀切2 地形測量図・断面図



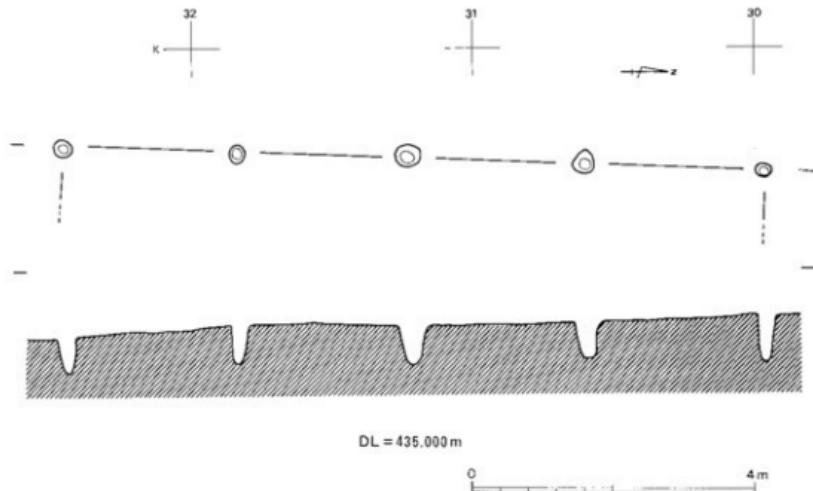
第14図 堀切1・2セクション図

堀切1（第8図）

Ⅱ郭Aの北側、L—14・15・16に位置する。地表面で存在を確認できた。城跡の最北端の防御施設である。堀切の東側は、急傾斜面で調査不可能である。西側斜面緩やかで下方まで掘り切られている。規模は、Mラインで上場幅6mで深さ1.5mを測る。Lラインになると上場幅3.8mとなり狭くなる。推定の全長は約8mである断面は、緩やかに開くV字形である。上端部で土層観察用のベルトを残したが、表土層を除去すると礫層になり分層は不可能であった。出土遺物は皆無である。

堀切2（第8・13図）

Ⅰ郭の北側で、IからNの23・24ラインに位置する。西側斜面は、下方まで掘り切られており地表面で確認できた。Ⅱ郭Aの南側部分を占める地点は表土層を除去した段階で検出し、西側斜面の堀切に連続するものであることを確認した。Ⅱ郭Aの南側部分は堀切を埋めて平坦部を形成しており、東端部は石垣3、西端部は石垣5によって補強されている。規模は、Mラインで上場幅4.7m、下場幅0.4mで深さ1.6mを測る。西側斜面のJラインになると上場幅2mとなり狭くなる。推定の全長は、約20mである。断面は、V字形である。Mラインの土層は、Ⅰ層表土・Ⅱ層礫層・Ⅲ層暗褐色土（礫多量含有）・Ⅳ層礫層・Ⅴ層暗黄褐色土・Ⅵ層黄褐色土（小礫多量含有）・Ⅶ層暗褐色土（小礫多量含有）である。西側斜面の堆積状況は、Ⅰ層表土・Ⅱ層淡黄褐色土・Ⅲ



第15図 SB 1 実測図

層暗褐色土・IV層赤褐色土・V層淡黄褐色土・VI層暗褐色土・VII層礫層・VIII層淡黄褐色土・IX層礫層である。V層では、細片であるが土師質土器が出土している。その他の出土遺物として、瓦質土器(24)が出土している。

3. II郭B

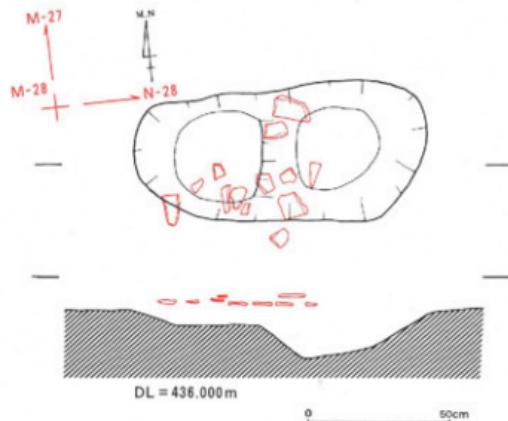
S B 1 (第15図)

調査区の南部K—29~32区のV'層上面において検出した。桁行9.9mで梁間は不明である。東側が岩盤となっており東側列は直接岩盤を利用していたと考えられる。推定では2間×4間か3間×4間の掘立柱建物跡になる可能性がある。棟方向は、N—2°—Eである。柱間寸法は、P 1～P 2が2.5m、P 2～P 3が2.4m、P 3～P 4が2.5

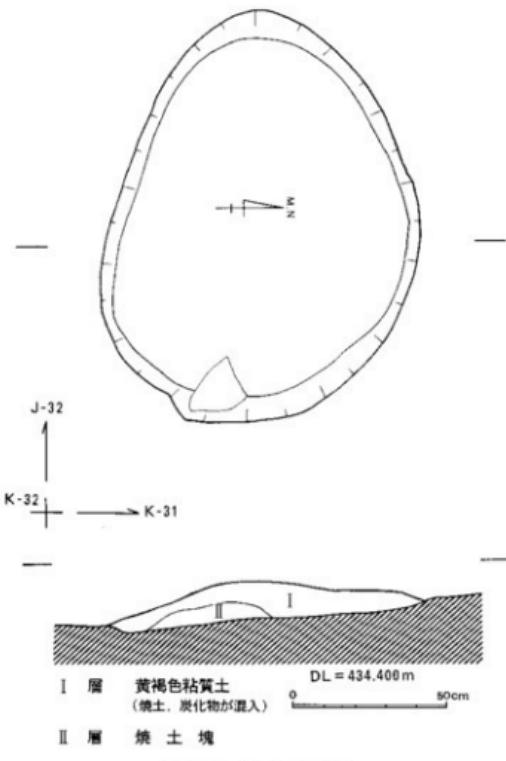
m、P 4～P 5が2.5mである。柱穴の掘り方は、ほぼ円形で直径24～36cm、検出面からの深さは平均で55cmを測る。底面の標高は、433.6～433.9mを測る。柱穴の埋土は、暗褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

S K 1 (第16図)

調査区の北東部M—28区の表土層を除去した段階で検出した。表土層下は岩盤となっており二段にくりぬいている。平面形は長い梢円形を呈し、長辺1.05m、短辺0.45mを測る。深さは検出面から、西側が7cm、東側が17cmを測り東側が一段深くなっている。底面は西側が平坦で標高435.93m、東側が傾斜して立ち上がり標高435.83mである。長軸方向は、N—88°—Wである。南北の断面形は逆台形を呈し、壁は比較的緩やかに立ち上がる。埋土は、1層で暗褐色土である。遺物は埋土上層から備前焼の壺(21・23)・青磁(18・20)が出土している。



第16図 SK 1 実測図



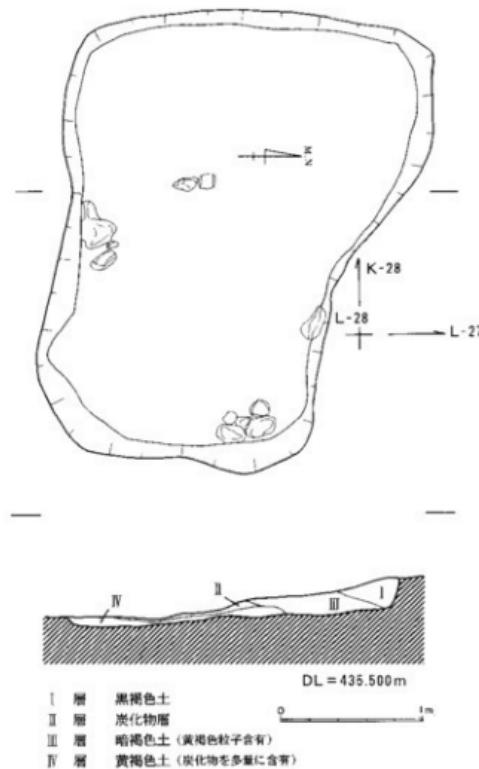
第17図 SX 1 実測図

S X 1 (第17図)

調査区の南西部 J—31区でⅢ層除去後のV'層上層で検出したがプランが不明確なためやや掘り下げた。平面形は楕円形を呈し、長辺1.36m、短辺1m測る。長軸方向はN—84°—Wである。深さは、検出面から13cmを測り南側がやや深くなっている。壁は短く緩やかに立ち上がる。底面は、南側から北側にかけて緩やかに高くなり標高434.25mである。埋土は、黄褐色粘質土に焼土・炭化物が混じるものである。さらに南側には焼土塊が径30cmの範囲で厚さ10cmで堆積している。遺物は埋土中から土師質土器・不明鉄製品(29)・スラグが出土している。土師質土器は、細片で実測不可能である。

S X 2 (第18図)

調査区の北西部K—27・28区・L—28区でⅢ層除去後のV'層上層で検出した。平面形は不整方形を呈し、長辺3.2m、短辺2.6m測る。長軸方向はN—88°—Wである。深さは、検出面から



第18図 SX 2 実測図

西側16cm、東側36cmを測り東側がやや深くなつており、壁は急傾斜で短く立ち上がる。底面は、西側から東側にかけて緩やかに高くなり標高434.8mである。埋土は4層に分割でき、I層黒褐色土・II層炭化物層・III層暗褐色土（黄色粒子含有）・IV層黄褐色土（炭化物を多量に含有）である。遺物は埋土中から上部質土器（8）・フィゴの羽口（31）・スラグが出土している。

土壘1（第8図）

II郭Bの南・西側を取り囲む様に残存する表面観察で確認できた。東側は、岩盤が切れるL-33区から構築されており、J-33区で北側に屈曲し方向を変える。K-29区で不明確になる。規模は、東西約9m・南北約15mで幅は1~2.3mを測る。構築面からの高さは約1mである。土壘南側は、約40°の傾斜でIII郭に至る。

VI 出土遺物

和田城跡は、小規模な山城という性格であることから出土遺物も少ない。遺物は、Ⅱ郭Bを中心に出土している。出土遺物総点数339点で、土師質土器180点、輸入陶磁器の青磁11点、白磁1点、国産陶器は備前焼で30点、瓦質土器7点、古銭19点、スラグ53点、羽L134点、鉄製品5点である。輸入陶磁器の染付は認められない。本城跡でも多数を占める遺物は土師質土器で総点数56%を占めており県内の中世山城の出土状況と同じである。包含層出土の遺物が大半であるが、若干遺構からも出土しているので遺構・遺構外出土と述べていくことにする。

1. 遺構内出土遺物（第19・20図）

S K-1 (No.18・20・21・23)

18は青磁の碗である。復元口径15.7cm、残存器高4.5cmを測り、内外内無文で体部は内弯して外上方に立ち上がり口縁部は外反する。内外面に貫人が入り胎土は灰白色で、外面オリーブ灰色釉が施される。20は同じく青磁の碗であるが、さらに細片で復元口径16.8cm、残存器高5.1cmを測る。内外面無文で形態は18と同様であるが、内外面に貫入が入らない。胎土は灰白色を呈し、外面濃オリーブ灰色釉が施される。21・23は備前焼の甌である。いずれも口縁部が玉縁状を呈するが形態に若干の差が見られる。21は、復元口径51cmを測り、口縁部は外反する。ロクロナデが施され内外面にぶい赤褐色を呈する。23は、やや肩が張り口縁部も21と比べると玉縁が小振りになり、上方に立ち上がる形態である。ロクロナデが施され外面淡黄褐色、内面灰褐色を呈する。

S X-1 (No.29)

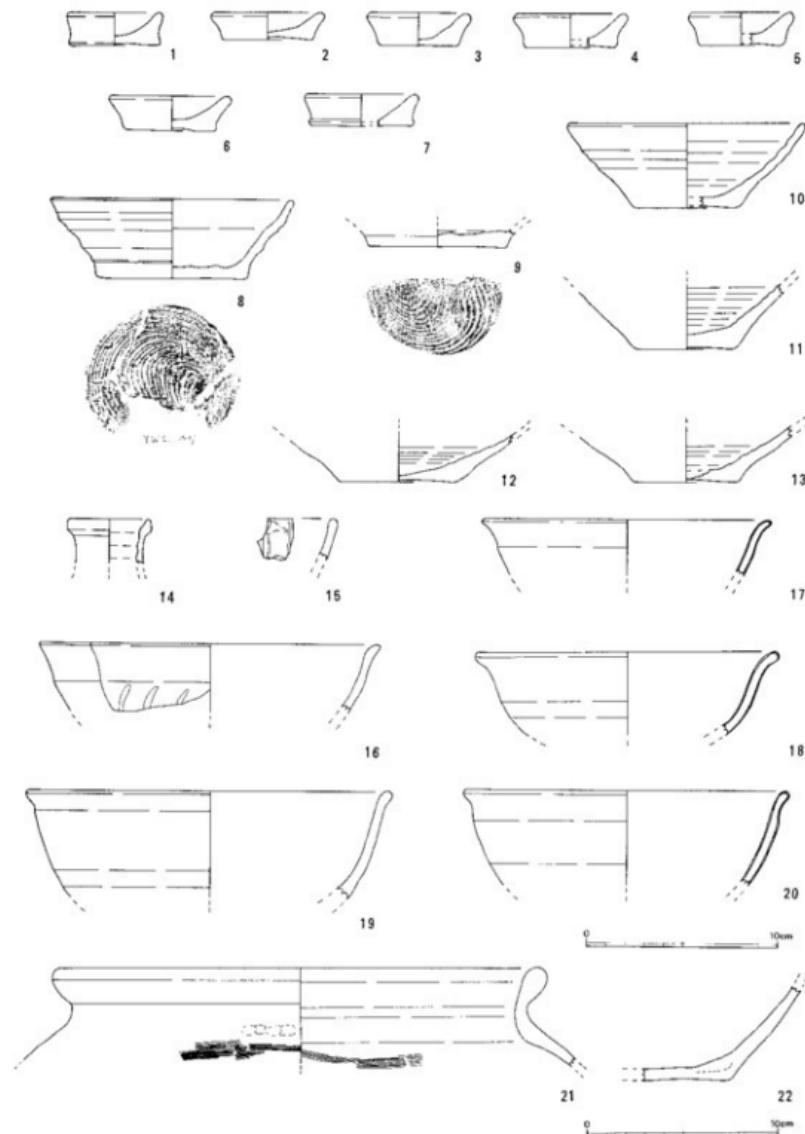
29は不明鉄製品である。長さ4.2cm、幅0.5cmを測り小形の製品である。端部で緩やかに屈曲しており、さらに円形状の突出部が付く。共伴遺物に土師質土器が見られる事とから中世の製品と考えられる。本製品の形態が火縄銃の火挟みの部分品に酷似している。

S X-2 (No.8・31)

8は土師質土器の杯である。口径は12.4cm、器高4.3cm、底径7.9cmを測る。体部は直線部で外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面のロクロ痕は明瞭であるが、内面は不明瞭である。底部外面は回転糸切り痕が残る。胎土は精選され、色調は淡黄色を呈する。31はフイゴの羽口である。直径8.2cm、中央の孔が2.5cmを測り、胎土は荒い。口の部分に硅酸質の付着も認められる。

堀切-2 (No.24)

24は瓦質土器の土釜である。口径15cm、残存器高8.5cmである。胴部は、内弯気味に上方に立ち上がり、口縁部は玉縁状に肥厚し外反する。胴部上位には、貼付の把手状の突起が見られる。口縁部と肩部の境には段を有し、外面は口縁部が丁寧なミガキ、胴部が粒状の斑点が施される。



第19図 遺物実測図 1

内面は横ナゲ調整である。色調は、内外面灰色で0.5~1mmの砂粒を含有する。焼成は良好である。

2. 遺構外出土遺物（第19・20・21図）

遺構外出土の遺物は、主にⅡ郭BのV層の包含層からの出土が多い。種類・器種ごとに出土状況も含め説明していくことにする。

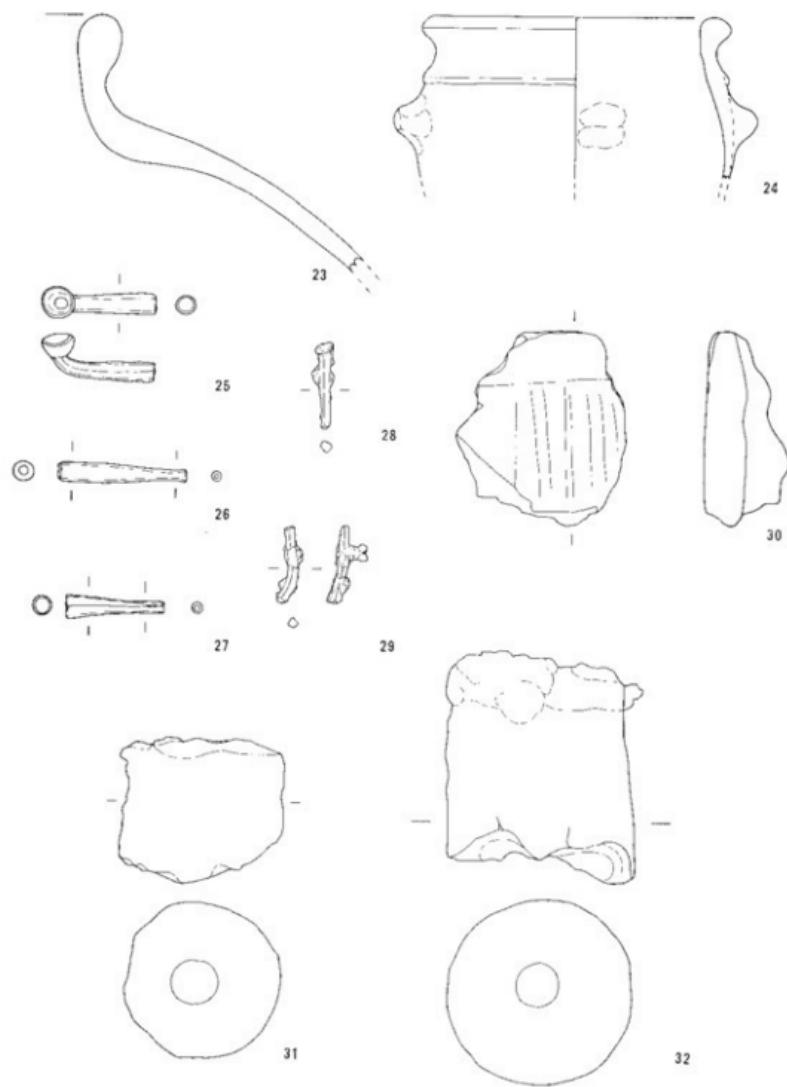
土師質土器（1~7・9~13） 小皿と杯が存在する。1~7は小皿である。これらの小皿は、K-30区でI層を除去した段階でまとめて出土した。疊層の中で土塊中に混入した状況である。2の小皿の中には、34の古銭が納められていた。口径は、4.6~6.1cm、器高1.5~1.9cmを測る。ロクロ成形で平坦な底部から短く外上方に立ち上がる。底部は、摩耗して不明なものが多いが糸切りされるものが多い。色調は橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。

9~13は杯である。9は底部破片であるが、底径が広く外面は回転糸切り痕が残る。10は復元口径12.3cm、器高4.5cmを測り、体部は直線的に外上方に立ち上がる。ロクロ成形で、内面にもロクロ痕が残る。摩耗が著しいが底部外面は、回転糸切りが施されたものである。11~13も、口縁部が欠損しているが、体部が直線的に外上方に立ち上がる形態を呈するものである。12のみは体部の外傾度が広く、いずれも摩耗が著しいが、体部内面にはロクロ痕が残る。底部外面は回転糸切り調整と考えられる。精選された胎土で、色調は黄褐色から橙色を呈する。杯類は、9が堀切2の西斜面下層から出土しており、その他はⅡ郭BのⅢ層から出土している。

白磁（14） 瓶の口縁部破片が1点出土している。端部はやや外反し小玉縁状を呈する。内面にロクロ痕が残り白濁色釉が施される。K-27区のIV層から出土している。

青磁（15~17・19） すべて碗である。15は口縁部の細片であるが、外面に継描きの細蓮弁文が施され、内外面に荒い貫入が入る。K-30区のV層から出土している。16は復元口径17.8cm、残存器高3.7cmを測る。体部は内弯して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。体部外面に丸ノミ状工具による蓮弁状の文様が施される。内外面密な貫入があり、淡い青緑色釉が施される。J-32区のI層から出土。17は内外面無文の碗で、復元口径15cm、残存器高3cmを測る。体部は内弯して外上方に立ち上がり口縁部は外反する。内外面密な貫入があり、青緑色釉が施される。K-27区のIV層から出土している。19は大振りの碗で、復元口径19.1cm、残存器高5.7cmを測る。内外面無文の碗で、体部は内弯して立ち上り口縁部が外反する形態で、18と比較すると口縁部の外反度は弱い。内外面に貫入があり、摩耗が著しく青緑色釉が色あせている。

備前焼（22） 壺の底部破片である。平坦な底部から屈曲した外上方に大きく内弯気味に立ち上がる。内面褐灰色、外面灰黄褐色を呈し胎土は0.5~1mmの砂粒を含有する。焼成は良好である。



第20図 遺物実測図 2

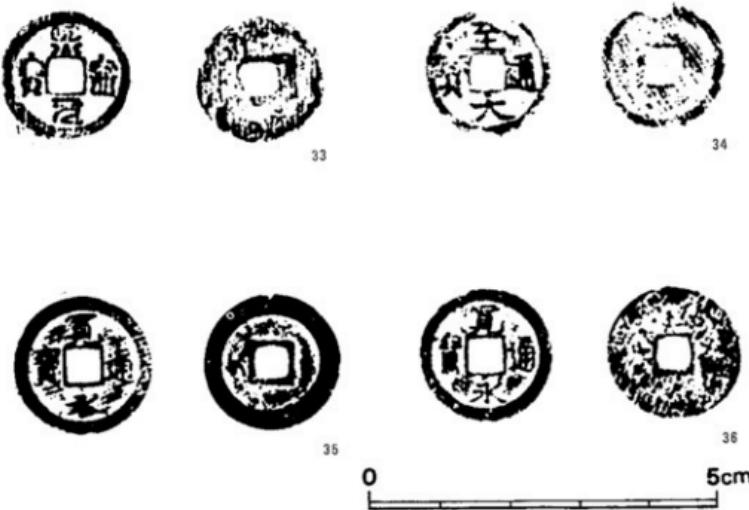
キセル（25・26・27） 近世の製品でⅡ郭BのI層から出土している。25は雁首の部分で、火皿の直径が1.7cmを測り、比較的深い。脣返しは、小さく湾曲して火皿に取りついている。火皿と主部の接合部には補強帯は認められない。26・27は吸い口の部分品である。テウの接合部分の直径は、1cmである。

鉄製品（28） 28は鉄製角釘である。先端部が欠損しているが、長さ5～6cmに復元できるものと思われる。頭部は直角に曲げられ、断面四角形を呈する。

瓦（30） 瓦は丸瓦で1点のみ出土しており、Ⅰ郭の西側でK-26区のV層からである。残存している長さは10.5cm、幅8.8cmである。凸面は幅1～2cmの縱方向のヘラ削り、凹面はコビキによる無数の緩弧線がつき、布目の痕跡も残る。

羽口（32） フイゴの羽口である。直径9.7cm、中央孔が2.2cmを測り、刃が欠損している。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は荒く口の部分に硅酸質の付着が認められる。

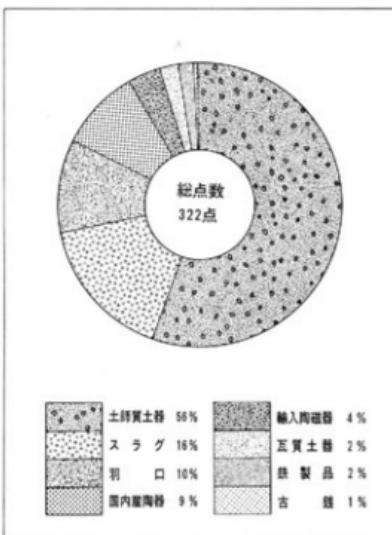
古銭（33～36） 33・34が渡来銭で、Ⅱ郭Bから出土している。33は、熙寧元宝（1068初鑄）で1.9gを測り、L-28区のV層出土である。34は、至大通宝（1310初鑄）で3.1gを測り、6の土師質土器小皿の中に納められていた。35・36は寛永通宝J-29区の表土層から出土している。



第21図 古銭拓影

VII まとめ

和田城跡は、「前田家蔵文書」にその名称がみられるのみで詳細は不明である。伝承では、津野氏の居城である柄原城の支城として伝えられている。和田城は、柄原川を自然の堀として利用されており、伊予からの進入路口にあたり防御的にも良好な場所に位置している。ここでは、出土遺物の考察を行い遺構の構築時期を検討することにする。出土遺物は、土師質土器・輸入陶磁器の青磁・白磁・備前焼・羽口・鉄製品・古銭・瓦・スラグ等がある。出土遺物を概観すると土師質土器がその大半を占め国産陶器の備前焼、輸入陶磁器、瓦質土器となり他の山城と比較しても同様な出土様相である。土師質土器は、小皿と杯が出土しており小皿は出土状況、形態等を考えると同一時期で捉えてよいものと考えられる。34の至大通宝（1310年初鑄）がその中の一枚に納められていたが、小杯の時期をそれに当てはめるには時機尚早と考えられる。杯は8・9に見られる様に口径に対して2:1以上と底径が広くなるものと、10の様に底径が狭くなるものとに分けられることができる。さらに底径が狭いものは、内面にロクロ痕が明瞭に施されている。これらの相違点は田村遺跡群や十万遺跡・岡豊城跡の土師質土器と同様に認められる。これらのこととは、以前から指摘されている様に時期差を具現しているものと考えられている。¹¹ 前者を15世紀代、後者を16世紀代に大きく位置付けることができるのではないかと考えられる。15~20までは輸入陶磁器の青磁である。青磁を見ると、15のみが細片であるが口縁部外面に乱れた線描きの細蓮弁文が施されており、その他は16を除き内外面無文で口縁部が外反するタイプであり明らかに時期的差が認められる。¹² 備前焼は、21・23の玉環状の口縁部の形態からすると備前の編年でIV期に位置付けられるものであり青磁の口縁部が外反するタイプとほぼ同時期になるものと思われる。その他瓦質土器については1点のみ出土しているが、本県では始めて見る特異なものである。鉄釜を模倣して製作されたように胴部に粒状の斑点が施され、同形態のものが愛媛県の大洲市から出土しているとのことである。¹³ 以上土器について検討を行ったが先述したごとく15世紀と16世紀のはば2時期に分けることができる。次に遺物から遺構の時期を考えて見たい。



第22図 中世出土遺物内訳

遺構は数少ないが、II郭Bから土坑と小鋸治跡・掘立柱建物跡・土塁、I郭・II郭Aから石垣・堀切を検出している。II郭Bの土坑SK-1は、内外面無文で口縁部が外反する青磁碗（18・20）とIV期に入る備前焼の甕（21・23）が共伴して出土していることから15世紀中頃から後半の時期におさえることができるものと考えられる。小鋸治跡のSX1出土の土師質土器は、細片で図示はしていないが、内面ロクロ痕が残る杯片であることから16世紀後半の時期にはいると考えられる。SX2は、底径が広い土師質土器の杯（8）が出土しており15世紀中頃から後半の時期である。堀切2は、埋土中より瓦質土器（24）が出土しており、この瓦質土器は、鉄釜を規倣していると考えられる点や、口縁部に丁寧なミガキが施されていることなどから明確には言えないが16世紀後半の時期を想定することができ、堀切2が埋められた時期のものと考えられる。その他の掘立柱建物跡・堀切1の時期は出土遺物が皆無のため不明である。

各遺構の時期について考察してきたが、ここで和田城跡の復元を考えてみたい。城跡の構築初現は明確に把えることはできないが、15世紀中頃から後半にかけてまず機能している。出土遺物がない遺構もあるため推定になるが、この時期は、城跡北端部の堀切1とII郭Aに存在した堀切2を構築し、II郭Bでは小鋸治跡のSX2、土坑のSK1及び土塁が存在していたと考えられる。この時期は、津野氏が椿原城を居城としていた頃で支城として和田城は機能していたものと考えられる。その後城跡の機能は一時低下しているがこの時期は、津野氏が葉山村に進出し姫野ヶ城を拠点として勢力を伸ばした時期である。³⁹その後16世紀後半でも天正年間になると長宗我部氏が土佐を制覇するようになるが、和田城もこの時期に再び機能している。この時期の遺構としてII郭Bには、土塁に囲まれて掘立柱建物跡・小鋸治跡のSX1が存在し、城跡北端部の堀切1はそのまま機能していたと考えられ、II郭Aの堀切2は埋め戻され平坦部の拡張を行っている。堀切を埋め戻した関係上土留めのため、東・西端部を石垣3・5で構築している。さらにI郭を防衛するため、石垣1・2・4を同時に構築している。I郭は、神社改修及びシイの木の攪乱が著しく調査不可能であったが、現在でも小さな祠が残存している。I郭は城跡の中でも当時重要な部分であったと想定できる。I郭の西側のV層から1点であるが、凹面コビキ痕と布目痕がつく中世の丸瓦片が出土している。⁴⁰ I郭には小規模であるが瓦を葺いた建物が想定でき、この建物を守るために周囲に石垣を構築したものと考えられる。土佐においては、城跡の跡の部分に祠が存在する所が多く城八幡につながる可能性がある。⁴¹ 城八幡の研究は今後の課題であるが、この時期に瓦を少量ながらこの地に持ち込み、石垣を構築しI郭に存在する小規模な建物を防衛するという行為は城八幡の存在を推定できるのである。これら瓦生産集団を把握し、石垣技術を持ちえるのは、長宗我部氏しか考えられず伊予進行にともない、地理的条件を利用しその拠点を和田城としたのではないかと考えられる。

伊予側の城跡を若干概観すると⁴²、東宇和郡城川町室野に三滝城が存在し、土佐国境から直線距離にして僅か3kmの山地に構築されている。三滝城は、長宗我部氏によって滅ぼされたとの伝承が地元で残っている。和田城から西進すれば、国境から8kmの所に北宇和郡日吉村上鍵山所在の

萩ノ森城がある。この城は、北に進行すれば宇和、大洲に出られ、西進すれば三間平野に出ることができ、交通上・軍事上の要地とされている。その他の伊予の山城においても伝承に長宗我部氏の名前が散見できる。これらのことと総合して考えてみても、長宗我部氏の伊予進行に伴い重要な役割を果たした和田城跡の存在が浮かび上がるるのである。

以上今回の調査において遺物・遺構から推察できることを述べてきたが、文献も数少なく和田城跡を考えるには資料不足と言わざるをえない。地理的・歴史的背景の中で調査成果をもとに現時点で考えられる和田城跡の位置付けを大胆に推論した感もあるが、今後椿原城跡を含め周辺の中世山城の調査研究に期待する所である。

註

- (1) 東津野村の前田家に所蔵されている。
- (2) 松田直則・下村公彦「中～近世小結」(『田村遺跡群』第10分冊高知県教育委員会 1986)
- (3) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生(「十万遺跡発掘調査報告書」香我美町教育委員会 1988)
- (4) 森田尚宏・松田直則(『岡豊城跡発掘調査概報』高知県教育委員会 1989)
- (5) 松田直則「高知県における中世土器の様相」(『中世土器の基礎研究』Ⅲ 日本中世土器研究会 1987)
- (6) 上田秀夫「14～16世紀の青磁窯の分類」(『貿易陶磁研究』N: 2 日本貿易陶磁研究会 1982)
- (7) 関壁忠彦・森子「備前焼研究ノート(1)～(3)」(『倉敷考古館研究集報』1・2・5 倉敷考古館 1966・1967)
- (8) 高松短期大学・岡本健児教授に御教示頂いた。
- (9) 山本大「高知県の歴史」山川出版社 1972
- (10) 高知県で発掘調査により多量に瓦が出土している中世山城は、南国市岡豊城と中村市の中村城跡である。本城跡出土の瓦も同技法により製作されている。
- (11) 岡本桂典「中近世一西日本」(『考古学ジャーナル』305・1989)の城能跡でも指摘されている。
- (12) 愛媛県教育委員会(『愛媛県中世城跡分布調査報告書』1987)

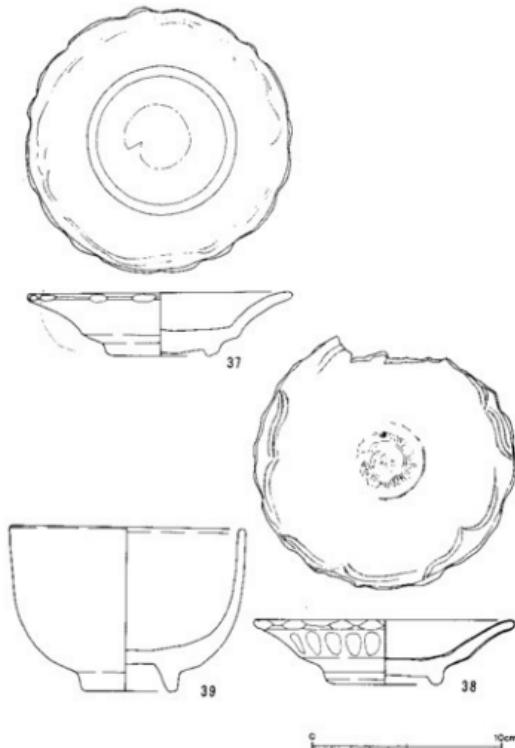
付編 桃原町唐岩番所に伝わる遺物について

桃原町歴史民俗資料館に、輸入陶磁器の青磁皿 2 点・国産陶器の椀 1 点が保管されており完形品に近い貴重な遺物であるため、ここで紹介をすることにする。

この遺物 3 点は、土予国境の越知面永野の四国カルスト横断幹口に所在する、唐岩番所に伝わる製品であるとされるが詳細は不明である。唐岩番所は、宝永元年（1704 年）に設けられており嚴冬積雪時以外は、ほとんど下方に所在する永野口番所により出張って番役を勤めている。唐岩番所は、以前には建物跡が残存していたが現在は、道路の開設に伴って撤去されている。

37・38 は、輸入陶磁器の青磁稜花皿である。37 は、口径 14.2cm、器高 3.3cm、底径 6cm を測る。体部下半で腰折れ口縁部は大きく外反する。釉は外面底部及び見込み内面が円形状の無釉で、その他は茶褐色釉が施され貫入が密に入る完形品である。38 は、口径 13.8cm、器高 3.3cm、底径 6

cm を測る。粗くヘラ削りされた高台から、腰折れで大きく口縁部が外反する。釉は、外底の一部が露胎で全面に緑色釉が施され密な貫入が入る。体部外面に広いそぎが施され、内面は口縁に沿ってヘラ切りで 2~3 本の弧線と、見込みには中心に印花文が見られる。口縁部が一部欠損しているが、ほぼ完形品である。これら 2 点は、15 世紀後半のものである。39 は国産のもので京焼風陶器である。口径 13cm、器高 8.6cm 底径 5.1cm を測る腰部が張り口縁部にかけて上方に直線的に立ち上がる。全面に黄緑色釉が施され密な貫入が入る。近世で 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけての製品と考えられる。



第23図 唐岩番所に伝わる遺物実測図

図 版



和田城跡遠景（南から）



和田城跡（東から）



II 郭B 調査前（南から）



II 郭全 景（北から）



Ⅱ郭B トレンチ設定（北から）



Ⅱ郭B 南北セクション



II 郷B 南北セクション



II 郷B 東西セクション



SK 1 遺物出土状況



SX 1

図版 6



SX 2



SX 2 羽口出土状況



SB 1 (北から)



SB 1 全景 (北から)



石垣 1 調査前（北から）



石 壁 全 景（東から）



石 壁 2



石 壁 3



石垣 4



石垣 2・4



石 壁 5 (西から)



石 壁 5 (南から)

図版12



石垣 5 (西から)



城跡調査後遠景



石垣 1・堀切 2



堀切 2 西斜面部



堀切 2 セクション



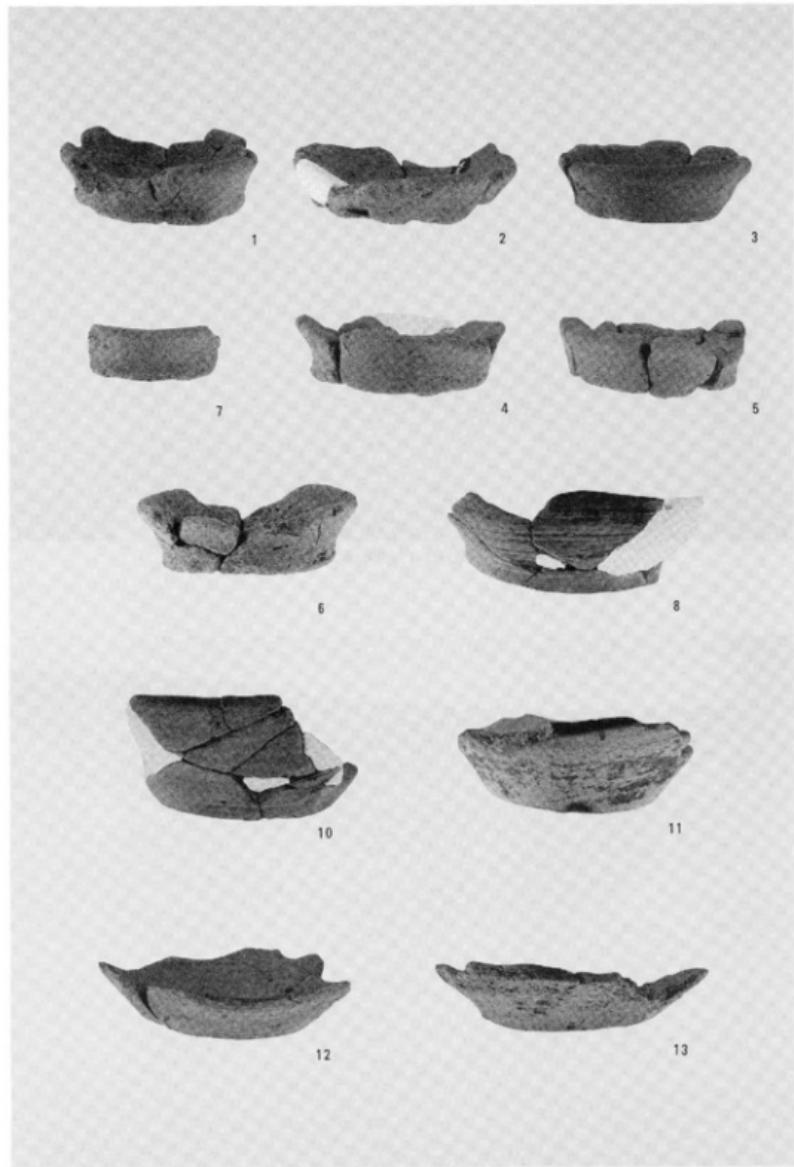
堀切 1 (南から)



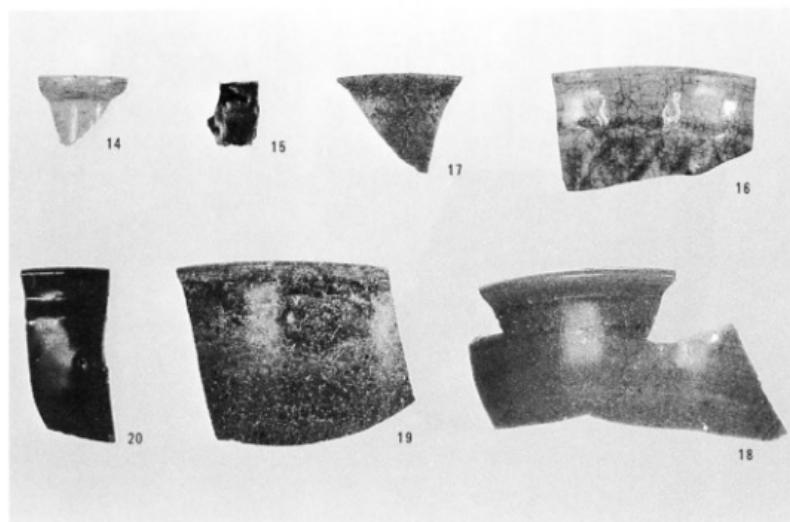
堀切1(北から)



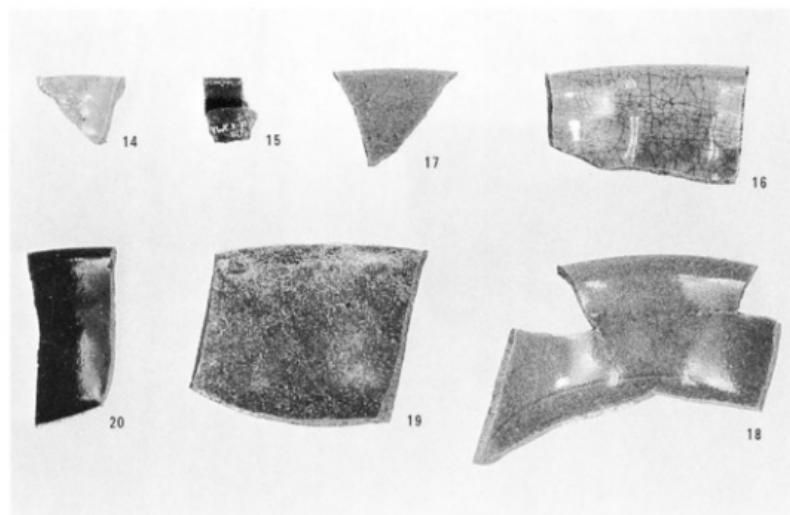
堀切1 セクション



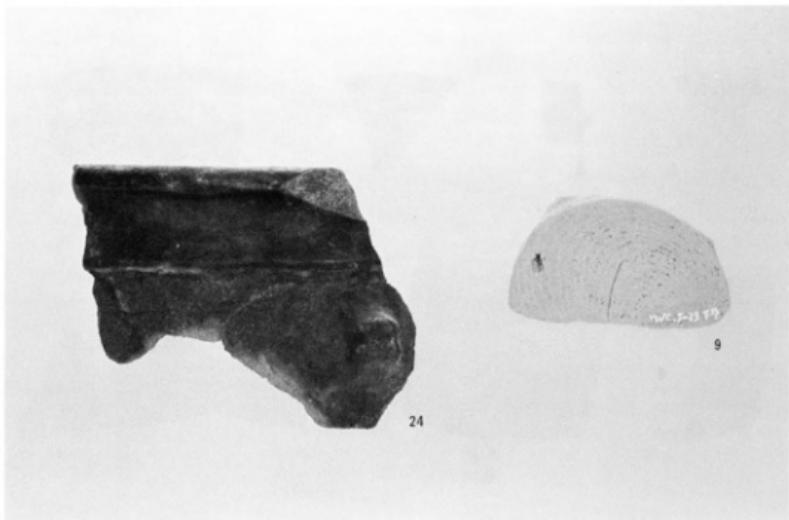
出土遺物 1



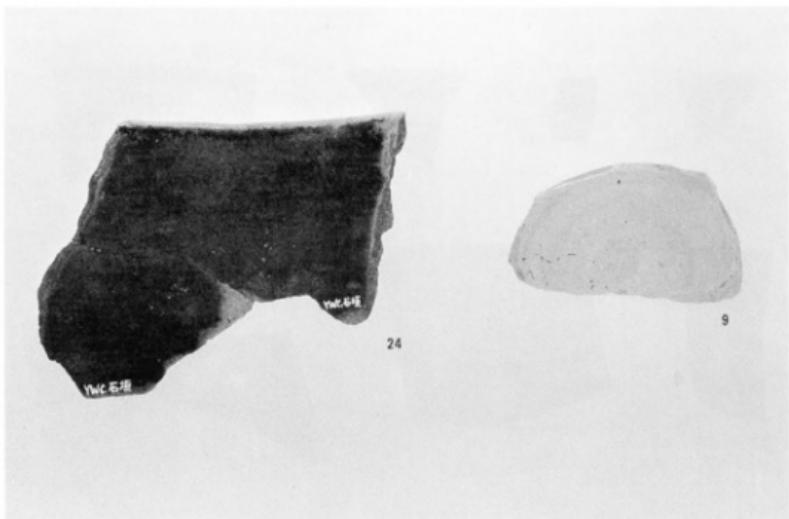
出土遺物 2—1



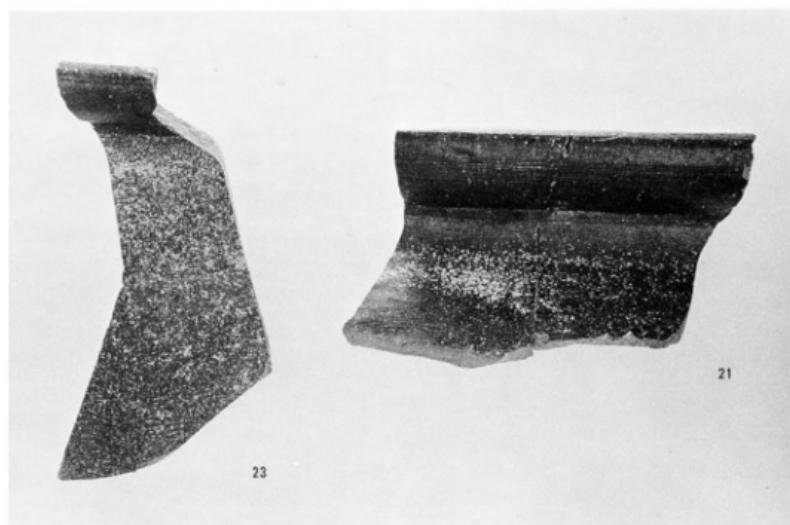
出土遺物 2—2



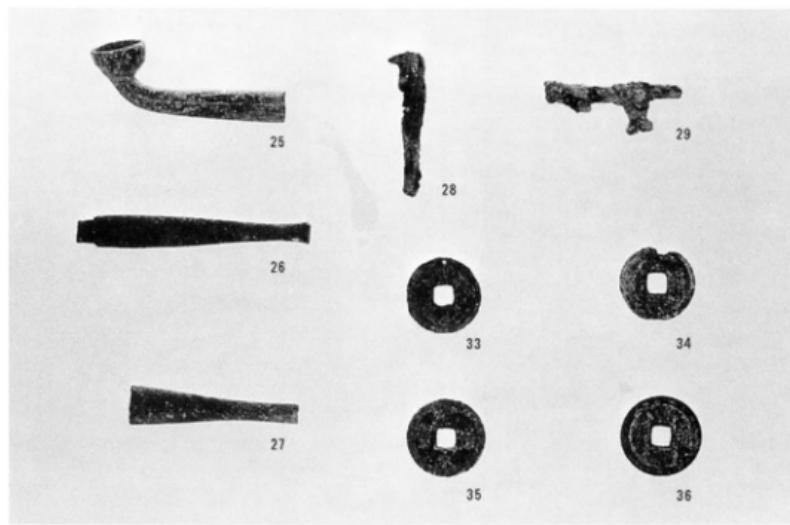
出土遺物 3—1



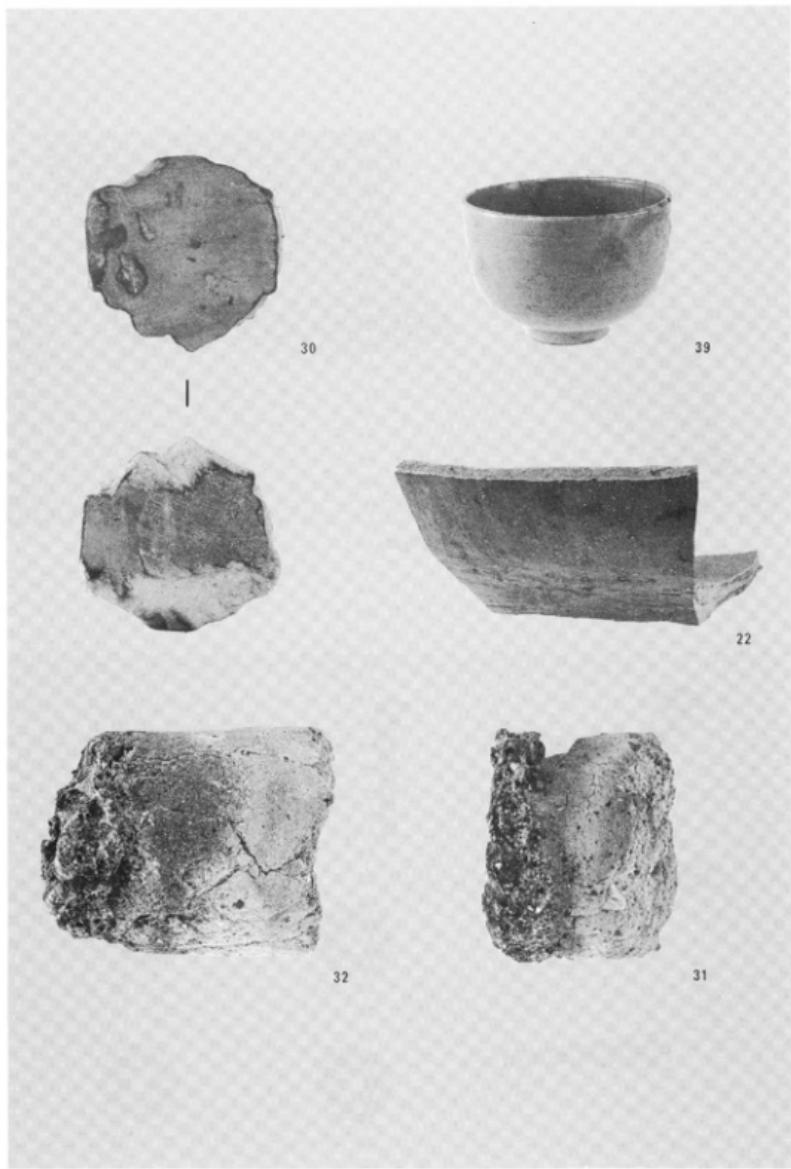
出土遺物 3—2



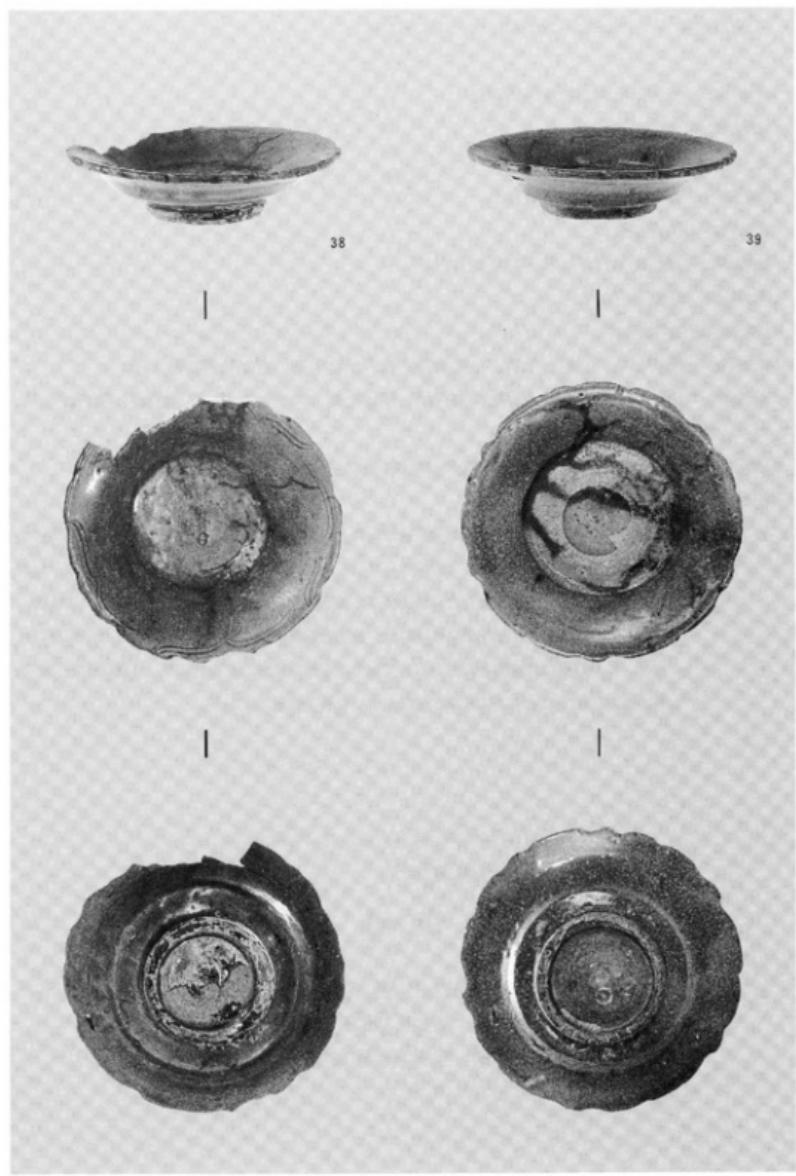
出土遺物 4—1



出土遺物 4—2



出土遺物・唐岩番所遺物 5



唐岩画所遗物 6

和田城跡 WADA CASTLE IN YUSUHARA

- <所 在 地> 高知県高岡郡梼原町川西路
- <遺跡内容> 中世山城
- <立 地> 独立丘陵
- <調査主体> 高知県梼原町教育委員会
- <調査原因> 防災事業
- <調査期間> 昭和63年11月7日～同年12月21日
- <遺跡面積> 推定 8,150m²
- <調査面積> 約 1020m²
- <検出構造> 堀切 2条、石垣、土壘、小鍛冶跡 2基、土坑 1基、掘立柱建物跡 1棟
- <出土遺物> 中世—土師質土器、青磁、備前焼、瓦質土器、スラグ、羽口、鉄製品、渡米錢、瓦近世—キセル、寛永通宝
- <執筆者> 梶原町教育委員会、松田直則（高知県教育委員会）
- <要 約>

和田城は、津野氏が居城とした梼原城の支城として伝えられている。伊予からの進入路口にあたり、梼原川を自然の堀として利用されており防御的にも良好な場所に位置している。利用された時期は、津野氏が支配した15世紀後半と長宗我部氏に支配された16世紀後半の2時期に分けることができる。16世紀後半の城跡は、長宗我部氏による伊予攻めの拠点として利用されており、この時期に最盛期である。支城である和田城跡の存在意義や、土佐において中世山城の跡に存在したとする城八幡を検討する一資料を提供している。

高知県高岡郡梼原町

和 田 城 跡

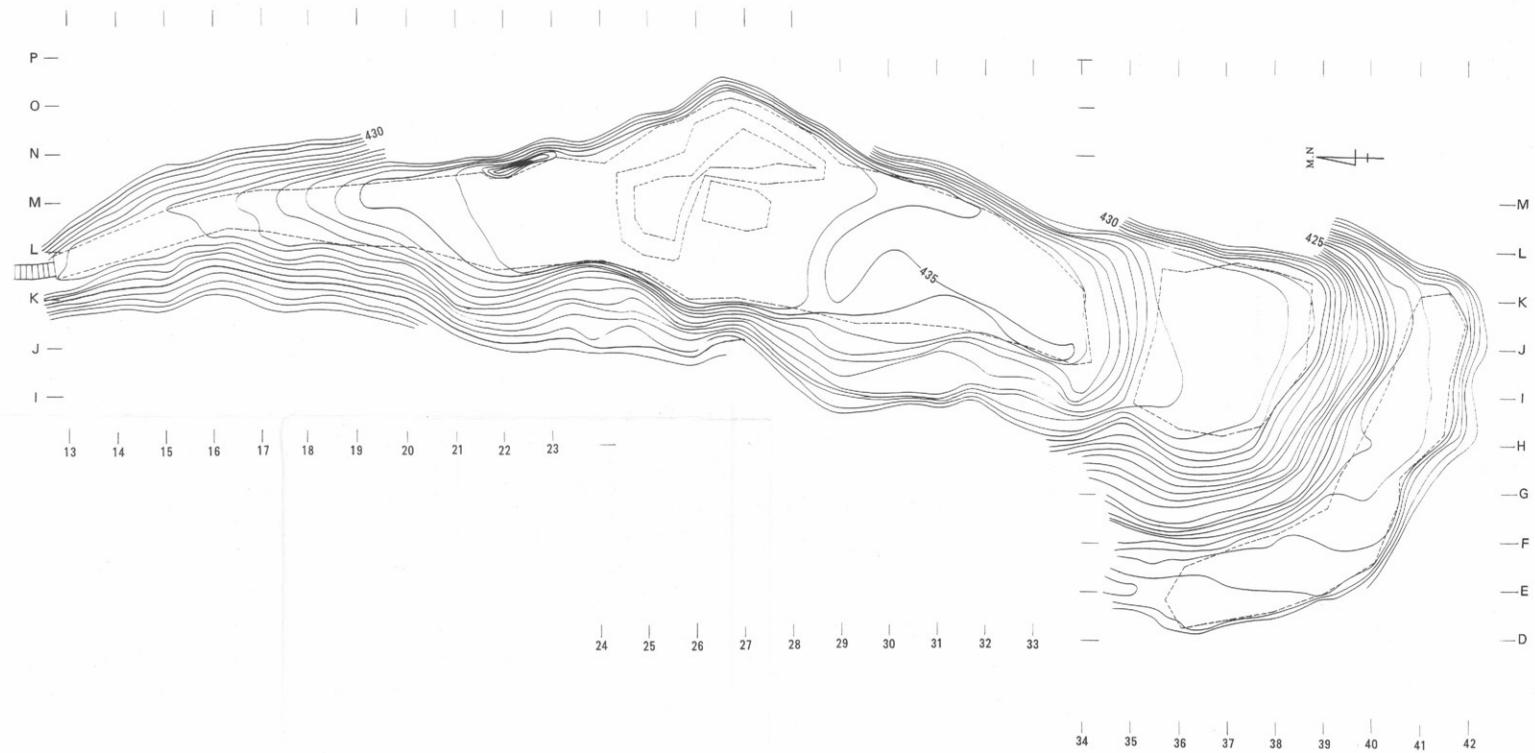
平成2年3月31日 発 行

編集・発行 高知県梼原町教育委員会

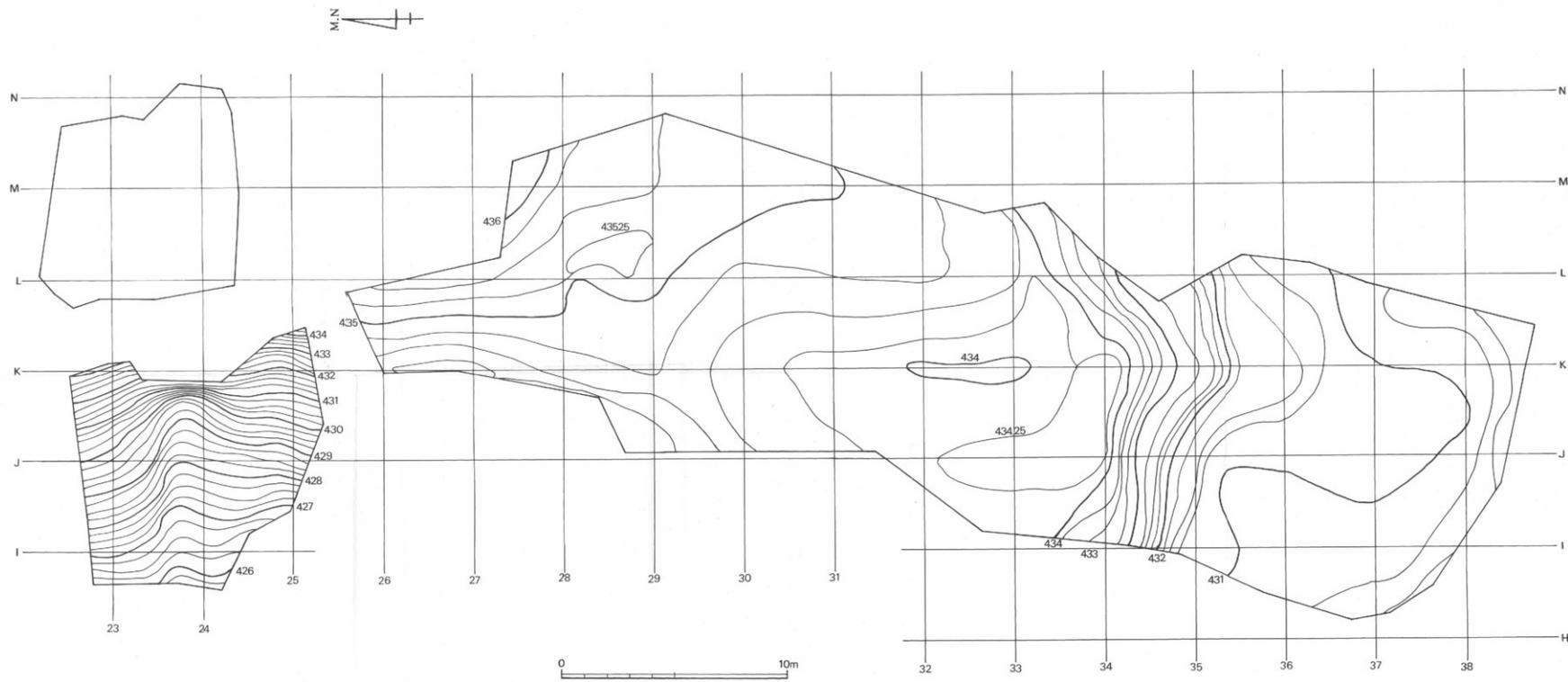
印 刷 中央印刷株式会社

付図 1 和田城跡発掘調査前地形測量図

付図 2 和田城跡発掘調査後地形測量図



付図1 和田城跡発掘調査前地形測量図 ($S = 1/300$)



付図2 和田城跡発掘調査後地形測量図

